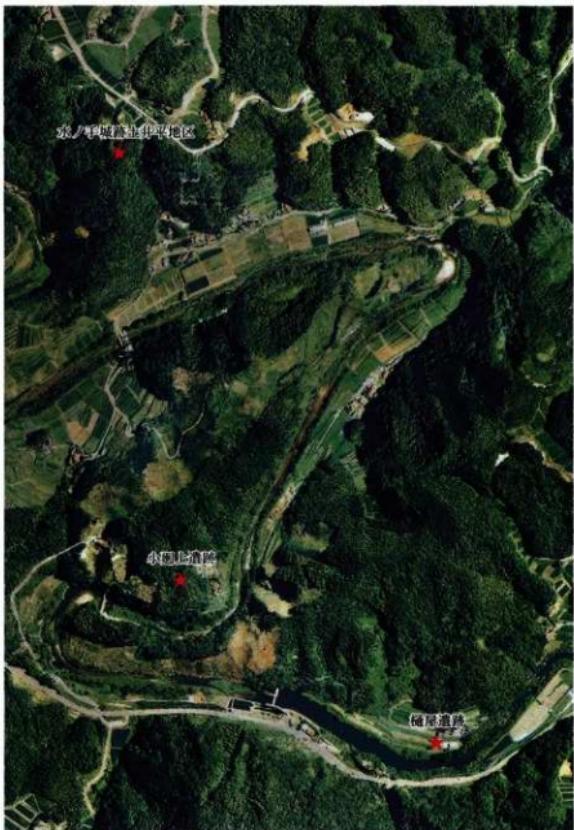


樋屋遺跡
水ノ手城跡土井平地区
小廻上遺跡

2006年6月

島根県

奥出雲町教育委員会



空から見た調査地点

序 文

奥出雲教育委員会（旧仁多町教育委員会）は、国土交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所の委託を受け、平成11年度から尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査を行っております。本書は、平成16・17年度に実施した樋屋遺跡、水ノ手城跡土井平地区の発掘調査記録であります。

ダム建設地が位置するここ斐伊川の上流は、かつて「肥乃河上」と称され、神話の舞台の地として広く知られ、古くからの遺跡がその数を増しつつあります。

今回の調査で、本書に収録した樋屋遺跡では、数千年も以前の斐伊川河岸が2段に出現し、4000年以前の縄文時代の土器や石器が礫群に挟まれて多数発見されました。

また、水ノ手城跡土井平地区では、大規模な堀切の目的の見直しや、その工法にカンナ流しの手法が確認され、広く山城築城技術を見直す成果を得ました。

これらの成果は、今後の当地方の歴史解明と歴史学習に活用され、文化遺産の保護に役立つものと期待をいたしております。

終わりに、本調査にあたり国土交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所、島根県埋蔵文化財調査センターをはじめ、関係の皆様方の格別のご理解、ご協力を賜りましたことに厚く御礼申し上げます。

平成18年6月

奥出雲町教育委員会

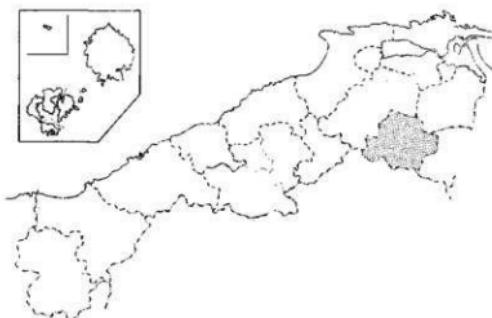
教育長 若 機 慎 二

例　　言

1. 本書は、奥出雲町教育委員会（旧仁多町教育委員会）が、国土交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて実施した、尾原ダム建設に関わる予定地内の埋蔵文化財について発掘調査した成果報告書で、各調査年次は次のとおりである。

越屋遺跡	鳥根県遺跡No. (N147)	平成16年調査
水ノ手城跡土井平地区	(N42)	平成17年調査
小廻上遺跡	(N141)	平成14年調査

2. 各遺跡の調査体制等はそれぞれの篇の見出しに示した。
3. 採図中の方位は、国上座標を用いたもの以外は原則として調査時の磁石方位で示す。高さは標高で示した。
4. 遺物の実測は野津・杉原・藤原友・家熊・佐野木・伊藤が行い、浄書は藤原友・佐野木が行った。写真撮影は杉原・伊藤が行った。遺物図と図版中の個体番号は同じである。
5. 執筆は野津・杉原・家熊で分担し、目次と文末に記した。編集は野津・杉原・藤原友・家熊が行った。
6. 出土遺物や調査図・写真等は奥出雲町教育委員会で保管している。



目 次

卷頭写真

序 文

教育長 若槻慎二

例 言

樋屋遺跡

(野津)

I 調査に至る経緯と経過	1
II 位置と環境	2
位置 立地と地形 周辺の遺跡	
III 調査の概要	6
調査の方法 遺構 遺物	
IV 土層と堆積について	8
V 遺構	10
第Ⅰ調査区・第Ⅱ調査区	
VI 遺物	17
土層中の遺物 縄文時代の遺物	
VII 若干の考察	28
縄文土器の出土状況 石器 集石について	
VIII まとめ	32
出土遺物観察表	33
付編 島根県仁多郡仁多町樋屋遺跡の基本十層序に関する調査報告	(立石) 37

水ノ手城跡土井平地区

I はじめに	43
調査に至る経緯 立地と環境	
II 横堀部の調査	59
遺構 遺物	
III 大堀切部の調査	63
IV 水を用いた堀切の手法検討	65
大堀切部の計画意図 水路(井手)と用水について 水流による掘削について 流下土の処理について	
V 近世遺構	70
遺構 遺物 遺構の年代と性格	

VII 炭窯跡	(杉原) ... 72
遺構の概要 操業の推定		
付編 水ノ手城跡土井平地区の火床遺構の地磁気年代	(時枝) ... 75

小廻上遺跡

調査の所見	(杉原) ... 89
立地 遺構の概況 まとめ		

揮 図 目 次

樋 庫 遺 跡

図 1 地形図	2	図13 構造遺構とピット群	16
2 地形断面図	3	14 上層中の遺物	17
3 周辺の遺跡 (縄文期)	4	15 縄文土器 (1)	19
4 斐伊川中～上流域の遺跡 (縄文期)	5	16 " (2)	21
5 調査範囲と区割り	7	17 " (3)	22
6 9ライン上層図	9	18 " (4)	23
7 I区平面図 (1)	10	19 " (5)	24
8 " (2)	11	20 " (底部)	25
9 集石遺構 (1)	12	21 収器 (1)	26
10 "	(2)	12	22 " (2)	27
11 "	(3)	12	23 " (3)	28
12 II区平面図	13～14			

水ノ手城跡土井平地区

図 1 出雲国内主要城跡等	53	図 8 十層図	64
2 水ノ手城跡縄張図	54	9 大堀切による斐伊川下流部の桝野範囲	66
3 調査地点図	55	10 集水域想定図	67～68
4 七井平の地形とトレンド配置図	57～58	11 火床遺構 (1)	70
5 Aライン上層図	57～58	12 " (2)	70
6 A地点 平面と断面	60	13 炭窯跡実測図	73
7 遺物区	61			

小廻上遺跡

図 1 位置図	90	図 4 完掘地形区	92
2 地形図	91	5 三沢城跡との関係	92
3 十層図	91			

図 版 目 次

種 屋 遺 跡

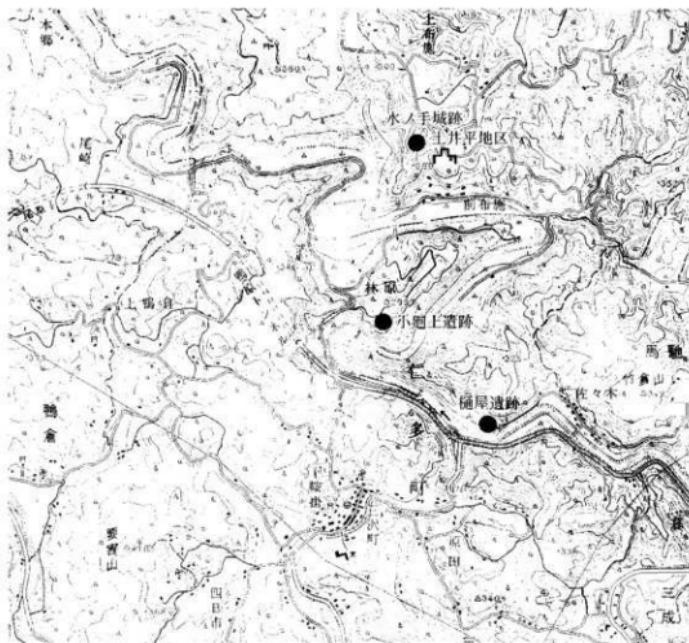
P L 1 第Ⅰ調査区	40	P L 7 縄文上器 (1)	46
2 第Ⅱ調査区	41	8 "	(2) 47
3 遺構	42	9 "	(3) 48
4 遺物出土状況など	43	10 "	(底部) 49
5 土層の調査と指導会など	44	11 石器	50
6 上層中の遺物	45		

水ノ手城跡土井平地区

P L 1 調査区遠景	79	P L 5 大堀切部	83
2 横堀部	80	6 火床部及び説明会等	84
3 埋め戻し保存	81	7 灰窓遺構	85
4 山土遺物	82		

小廻上 遺 跡

P L 1 小廻上遺跡	93
-------------	----



S = 1 : 25,000

樋屋遺跡

所 在 地	仁多郡奥出雲町馬馳673番地
調査面積	1500m ² (内発掘 1300m ²)
調査期間	平成16年6月1日～9月3日
調査主体者	仁多町教育委員会 教育長 ト藏良治
事務局	植田一教 (教育課長) 内田裕紀 (生涯教育係長) 平田昭憲 (社会教育主事)
調査担当者	野津 旭 (埋蔵文化財調査室)
調査員	杉原清一 藤原友子 佐野木信義 伊藤正樹 (埋蔵文化財調査室)
調査指導	島根県教育庁文化財課 蓮岡法暉 (日本考古学协会会员)
土層序調査	菅田康彦 (仁多町多根自然博物館) 立石 良 (島根大学総合理工学研究科マテリアル創成工学専攻)
調査協力	(株)トーワエンジニアリング (有)内田工務店 国際航業 (株) 社団法人中国建設弘済会 金山浩司 (技術員) 栗原久美子 (事務員)
調査作業者	青戸延夫 福間光雄 山根知雄 藤原厚子 安部ヒサエ 小村ちえ子 長谷川トミ子 福間新子 (社団法人中国建設弘済会)

I 調査に至る経緯と経過

樋屋遺跡は南に延びる尾根突端部前方に位置し、さらにその前方を斐伊川が迂曲して流れており、遺跡はその旧河岸地形に所在する。先年の島根県埋蔵文化財調査センターの分布調査により遺物の散布地とされ、“家の前遺跡”とされたところであるが、類似名称が多く混乱を招くおそれがあるため、調査区の旧小字地名によって“樋屋遺跡”と称することとした。

仁多町教育委員会（当時）は平成16年度に当該調査区域1500m²の発掘調査をおこなった。検出した遺構並びに遺物は縄文時代後期前葉を中心とする土器片、石器類、近世或は近代の麻蒸炉状遺構等であった。

調査は排土処理等を勘案し、まず川上側の約500m²からおこない、後半期に川下の約800m²をおこなった。

調査区の斐伊川寄りの旧河岸には川下の区を中心に縄文時代後期前葉の磨消縄文土器片、石鏟・石鐵・石斧等遺物が3300点ほど出土した。

その他、同じく斐伊川に近い調査区南側から麻蒸炉状遺構3基、調査区北端からは柱穴列、地山をカットした平坦面、溝状遺構を検出している。

本遺跡報告書作成作業は、同じく尾原ダム関連の寺宇根遺跡の現地調査との並行作業となり、厳しい時間調整が予想されたが、やっと報告書刊行となった。

なお、本遺跡の土層堆積成因を別途に専門の分析鑑定を依頼し、格別の成果を得た。

以下経過を列記する。

平成16年 5月17日	調査前地形測量（～19日）
5月21日	トレンチ調査（～25日）
5月26日	第Ⅰ調査区 重機による表土除去（～28日）
6月1日	第Ⅰ調査区 調査開始
6月30日	調査指導会 東森 晋（島根県教育庁文化財課）
7月2日	第Ⅰ調査区 完掘
7月5日	第Ⅱ調査区 重機による表土除去（～14日）
7月15日	第Ⅱ調査区 調査開始
7月20日	調査指導会 西尾克己（島根県教育庁文化財課）
8月11日	調査指導会 東森 晋（島根県教育庁文化財課） 熱田貴保（島根県埋蔵文化財調査センター）

8月27日	調査区の土層堆積状況を鑑定してもらう 菅田康彦（奥出雲町多根自然博物館）
9月3日	第II調査区 作業終了
9月14日	調査成果の整理を始める
平成17年11月21日	整理作業、報告書作成に取りかかる

II 位置と環境

1. 位置

桶屋遺跡は、島根県仁多郡奥出雲町馬馳673に所在し、国土座標第III系のX = -87.800 km、Y = +74.500 km地点が遺跡のほぼ中心で、標高約215 mである。そしてこれは北緯35° 12' 30"、東経132° 59' 00"に相当する。



図1 地形図

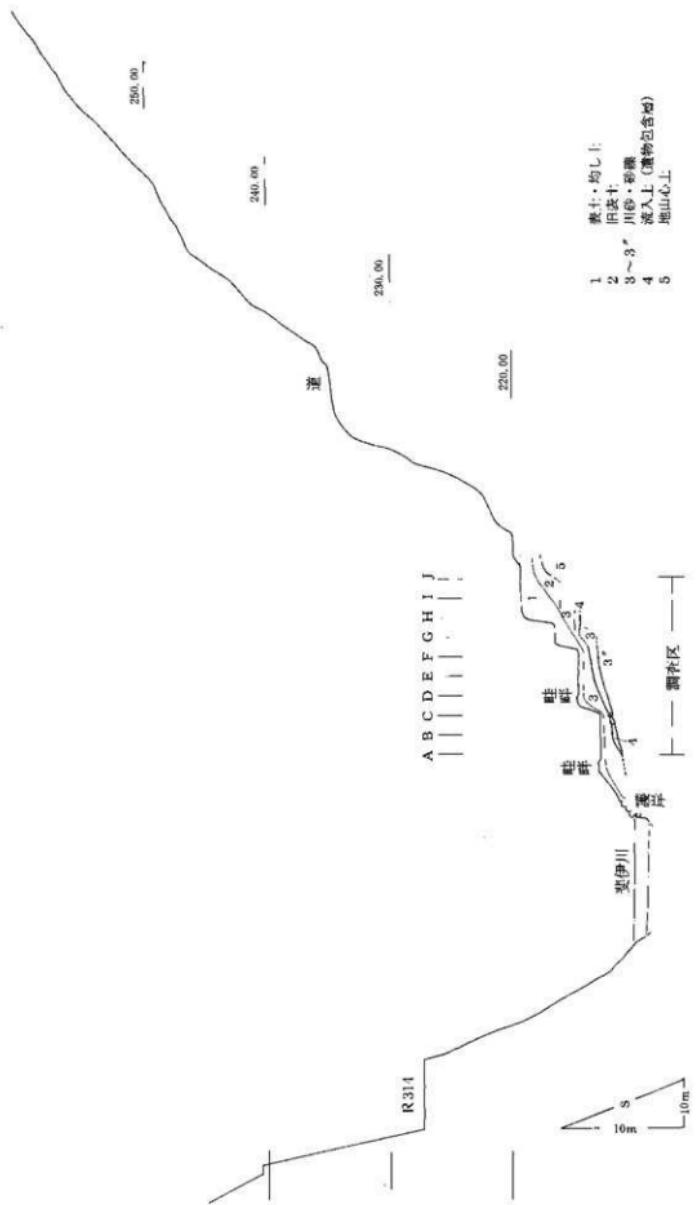


图 2 地形断面图

2. 立地と地形

本遺跡は南に延びる尾根突端部前方に位置し、さらにその前方を斐伊川が迂曲して流れており、遺跡はその河岸部に所在する。調査区全体に川礫がみられ、斐伊川の旧河岸部分である。

3. 周辺の遺跡（図1・2）

奥出雲町樋屋遺跡（1）は斐伊川本流の河岸段丘上に立地する。中国山地を源とする斐伊川は奥雲地方のほぼ中央を北流し、下流部では沖積平野を形成し宍道湖へ至る。

この流れの中へ上流域にあたる本遺跡周辺の縄文時代の遺跡を概観することとしたい。

從来より斐伊川本流・支流には縄文時代の遺跡が知られていたところであるが、近年の尾原ダム関連の埋蔵文化財調査の結果、神戸川中～上流域同様、より濃密に分布していることが判りつつある。

本遺跡から1kmほど上流の河岸段丘上に立地する暮地遺跡（2）は後期を中心とする遺跡で、埋甕2基と土偶3体が知られている。埋甕（上器埋設遺構）が確認された遺跡として、周辺には、県指定史跡である雲南省三刀屋町の宮田遺跡（27）、雲南省本次町の平田遺跡（8）、北原本郷遺跡（13）、家の後II遺跡（10）、奥出雲町佐白地区の原田遺跡（4）、前田遺跡（6）で10基を超える埋甕が出上している。また、土偶の出土した遺跡は北原本郷遺跡で3体、奥出雲町三沢地区の林原遺跡（5）では範囲確認調査により後期前葉から中葉のものと思われる品1体が確認されており、本調査の成果が期待されるところである。その他、原田遺跡、下鴨倉遺跡（7）、北原本郷遺跡、吉田の大原遺跡（29）で線刻梗や石棒が、木次の横ヶ堺遺跡（9）では朱塗りの耳栓が出土しており、呪具と思われる遺物が増加しつつある。また、雲南省三刀屋町六重地内で出土



図3 周辺の遺跡（縄文期）

地不明であるが右棒、右斧等の存在が知られている。

平田遺跡では上記の遺構のほか、大量の石礫や石斧の剥片が出土しており、石器工房の可能性があるとされた。北原本郷遺跡および家の後II遺跡では後期から晩期にかけての配石墓、貯蔵穴、堅穴住居跡などの多様な遺構が確認されている。また、垣ノ内遺跡(12)では中期の土器がまとまって出土している。

ト鴨倉遺跡(7)は平田遺跡から阿片川上流1.5kmの河岸段丘上に営まれたもので、出土した土器は、前期から晩期に至る山陰・山陽の諸様式をほぼ網羅しているばかりか、北部九州の影響も色濃い貴重な資料も出土している。近年の調査で木次町の川平I遺跡(11)では早期から晩期までの主要な土器様式がほぼ途切れることなくみてとれる。

図にあげた範囲で最も古いものに分類出来る遺跡は、斐伊川上流の旧横田町に所在する、押型文土器が出土した国竹遺跡(19)や下大仙子遺跡(20)、小万才遺跡(17)などで、早期に遡ることができる。上記の川平I遺跡でも早期の黄島式が出土している。

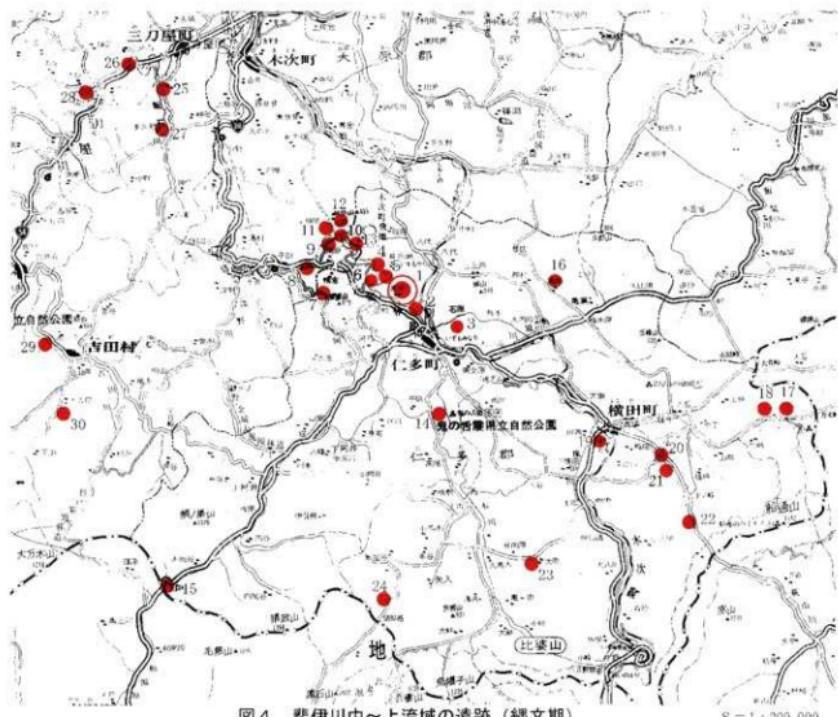


図4 斐伊川中～上流域の遺跡（縄文期）

S = 1 : 200,000

周辺の遺跡（縄文）

番号	遺跡名	種別	備考	遺跡地図※
1	鰐塚遺跡	散布地	縄文土器	本遺跡
2	暮地遺跡	散布地	埋甕、縄文土器、十偶 3 体、弥生上器、竪穴住居	N 56
3	里田遺跡	散布地	縄文土器	N 55
4	原山遺跡	複合遺跡	縄文土器、埋甕、玉類、大刀、古墳、石棒、線刻藻	N 135
5	林原遺跡	古墳・集落跡	縄文土器、土偶	N 61
6	前田遺跡	古墳・集落跡	縄文土器、埋甕、貯蔵穴、弥生土器	N 145
7	下鴨倉遺跡	散布地	縄文土器、墓壇、石組、石器、線刻模	N 5
8	平山遺跡	製鉄遺跡他	縄文土器、埋甕、石器、人骨、土壤、右器工房跡？	Q 22
9	横ヶ井遺跡	製鉄遺跡他	縄文土器、朱塗耳飾り、製鉄関連遺物	Q 77
10	家ノ後 II 遺跡	散布地	縄文土器、埋甕、配石土坑、石器、土師器、輸入陶磁器	Q 76
11	川平 I 遺跡	集落跡他	縄文土器、土坑、石器	Q 56
12	垣ノ内遺跡	集落跡	縄文土器、石器、土坑	Q 53
13	北原本郷遺跡	集落跡・包含層	縄文土器、埋甕、土偶 3 体、配石墓、石棒、線刻模	Q 110
14	宇根遺跡	集落跡	縄文土器、石斧	N 2
15	王貴遺跡	散布地	縄文土器、石器、住居跡？	N 61
16	宮ノ前遺跡	散布地	縄文土器、土師器	N 59
17	小万才遺跡	散布地	縄文土器	M 15
18	竹崎井西遺跡	散布地	縄文土器、須恵器、土師器	M 7
19	国竹遺跡	集落跡	縄文土器、弥生上器、石器、住居跡	M 147
20	下大仙子遺跡	住居跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、炉床	M 36
21	稗ヶ谷遺跡	散布地	縄文土器、土師器	M 38
22	龍ノ駒遺跡	散布地	縄文土器	M 1
23	曲谷遺跡	散布地	縄文土器、黒曜石	M 42
24	大鉄穴遺跡	散布地	縄文土器、石鏡	M 90
25	栗谷遺跡	散布地	縄文土器、石器、製塙土器	R 8
26	宮内遺跡	散布地	縄文土器、石鏡、玉石	R 3
27	宮田遺跡	集落跡	縄文土器、埋甕、土壙、貯蔵穴	R 9
28	檍原遺跡	散布地	縄文土器、石器	R 5
29	大原遺跡	散布地	土器、石棒	V 1
30	宮ノ奥遺跡	散布地	縄文土器、須恵器	V 78

※ 島根県教育委員会：『島根県遺跡地図 I (出雲・隠岐編)』2003.3 による。

III 調査の概要

先年島根県埋蔵文化財調査センターの行ったトレンチ調査により要発掘調査とされたこの地は、西に向って蛇行しながら流れ下る斐伊川本流の北側河岸で、尾原ダム建設に伴う町道佐々木線付替工事にかかる約1500m²を調査対象地としたところである。

1. 調査方法 (図3・4・5)

- 1) 事前に川に直行するトレンチを7本入れ、土層を確認した。
- 2) 調査区に4mメッシュを組み、川に沿う方向を数字で、川に直交する方向をアルファベットで表記する。以後、区の名称は区の南東杭をもってその区の名称とする。

- 3) 作業工程、排土処理等を勘案し、図5に示すとおり5ラインより東（川上部分）を第I調査区、それより西（川下部分）を第II調査区とし、漸次、発掘調査を進めた。
- 4) 調査区全域1500m²を地形測量し、発掘面積は1300m²であった。

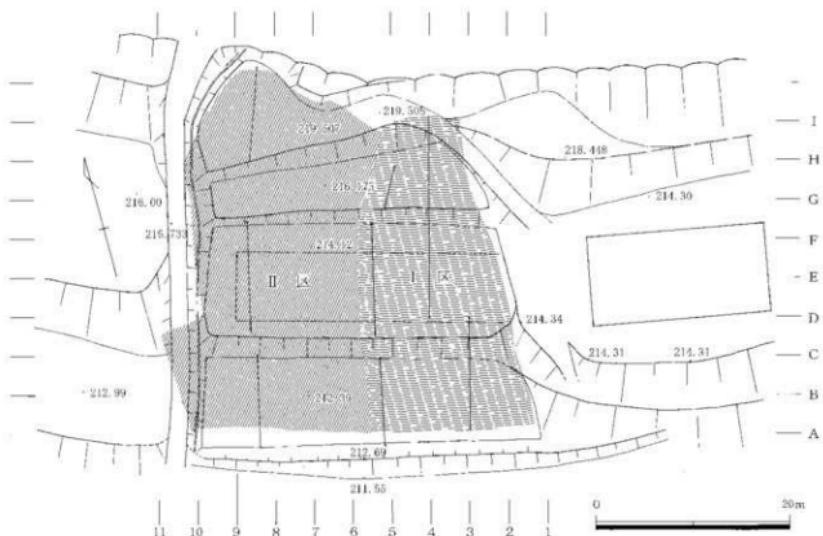


図5 調査範囲と区割り

2. 遺構・遺物

- 1) 第I調査区では、集石遺構1基を検出した。また、考古遺構ではないが、自然遺構として調査区南側だけでなく北側上段からも旧河岸跡を検出した。
- 2) 第II調査区では、調査区南側で集石遺構2基（うち1基はほぼ消滅）、調査区北端では柱穴列、地山をカットした平坦面、溝状遺構を検出している。また、縄文時代の遺構は検出しえなかつたが、I・II区のDラインより南側の旧河岸跡、とくにII区において川疊にへばりつくよ

種屋遺跡出土遺物集計表

縄文土器				須恵器			土師器			陶器			石 器		その他		
中期	後期	晩期	不明・ 精製 粗製 精製 その他	口縁 脣部	底部	他	口縁 脣部	底部	他	口縁 脣部	他	斧	錘	チップ	他	4	
4	222	2987	1 28	1	3			3	1	5	8	3	15	11	5		
3242				4			3			13			34				
3300																	

うに縄文土器片がやや密に出土した。

3) 出土遺物の内訳は、前頁のようであった。

詳細については各章で記述する。

IV 土層と堆積について

本遺跡は古い時代の斐伊川の河岸に所在し、土層配列は河川による微砂層をベースに砂を多く含むクロボク土が繰返し雪崩れ込み状に堆積するもので、調査区南側の標高の低いあたり、つまり旧河岸面に遺物がまとまって検出した。これらは縄文時代後期前葉を中心とする上器片である。また調査区北側の上層からは陶器・煙管等近世を示す遺物も数点みられた。

土層については本遺跡調査区の南北方向で最も広範囲に土層を確認できる9ラインを基本土層とし現表面から第1層～第8層に区分した。調査区の地形は、4～8ラインで湾入する。この傾向は上段でより顕著である。

調査区で最も長くとれる縦断である9ラインを標準的上層断面(図6)とし、分層すると次の表のような堆積状況であった。

第1層	表層	灰黄褐
第2層	盛上・均し土	褐灰
第3層	川砂(微砂～細砂)	明黄褐～黄褐
第4層	砂礫	にぶい黄褐
第5層	旧表土	褐灰
第6層	流入土(遺物包含層)	黒褐
第7層	流入土(黒色砂質土)	黒褐
第8層	地山	緑灰

第3～7層については、河川の流れの変化によって繰返し堆積したと考えられる。

なお、本遺跡の土層については別途鑑定を依頼し、その報文は付編として掲載する。

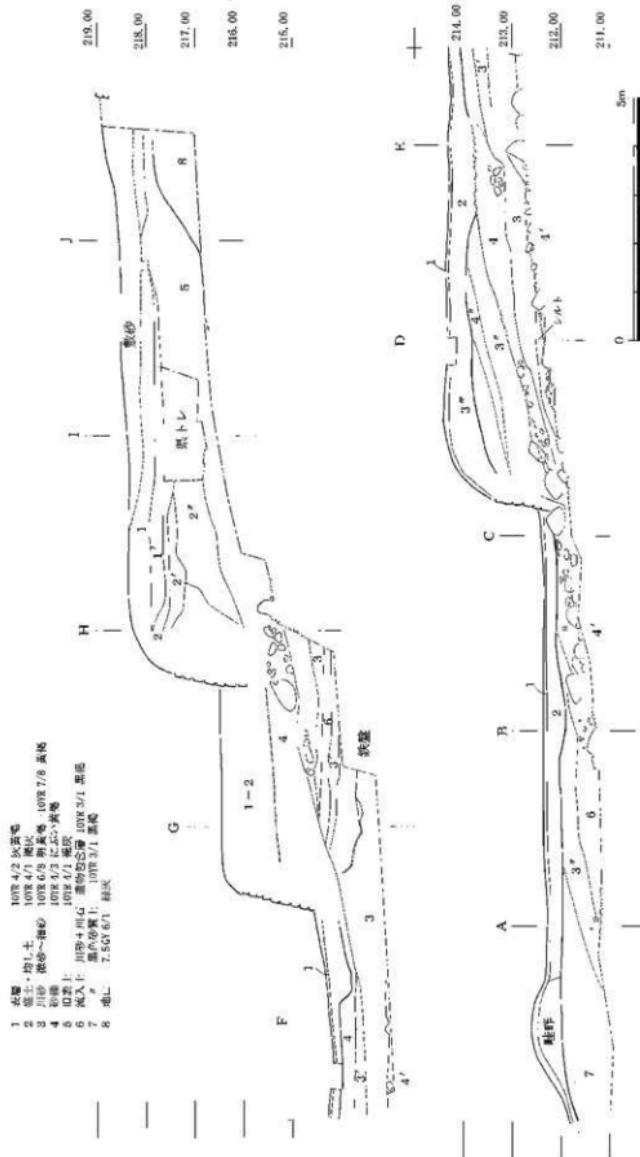


図 6 9 ライン土壌図

V 遺構

1. 第I調査区（図7・8）

調査区の上段は自然遺構である旧河岸跡（G～Hライン）を検出、中段は建物造成により遺物包含層は消失しており、下段では、G～Hラインの河岸より新しい旧河岸跡が全面に認められ、



図7 I区 平面図 (1)

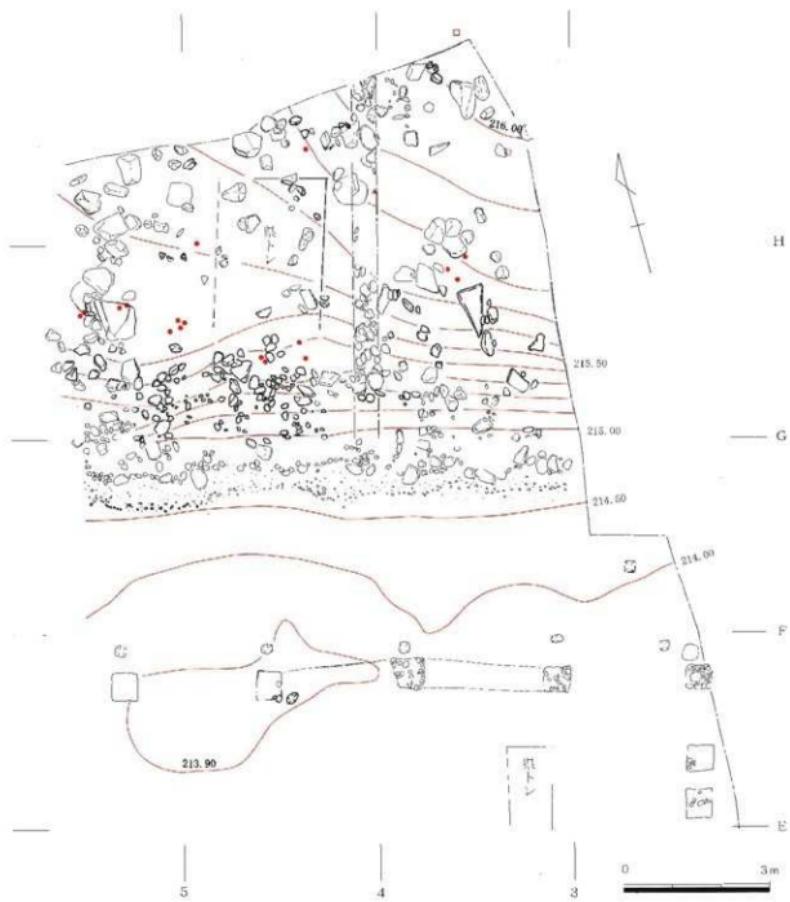


図8 I区 平面図(2)

そこに遺物が僅かに堆積している状況であった。さらに下段の旧河岸を覆う砂質土に集石遺構1が認められた。

1) 集石遺構1 (9図)

調査区南側(3B区内)で旧河岸と思われる大小の川礫の上に被ったやや黒色の川砂をベースに掘り込んでいたものとみられる。ベースが不安定なため厳密なプランの肩は明確ではないが、平面長円形の土坑のようだ。土坑の範囲は $1.0\text{m} \times 0.9\text{m}$ ・深さ 0.4m 。掘り方内には中小の自然礫や土坑面に貼られた粘土塊が被熱した状態で確認された。とりわけ、川上(東)側に著しい被

熱の痕跡が見受けられ、炭化物も残存していて、土坑内や上面で燃焼作業が行なわれたと考えられる。

2. 第II調査区（図12）

第I調査区同様、上段・下段で旧河岸跡を検出、下段のその淀み部にやや密に遺物が堆積していた。さらに集石遺構2も検出した。

1) 集石遺構2（図10）

B区の10ライン上にあり、集石遺構1同様、旧河岸面に被った黄褐色の川砂をベースに掘り込む。平面形は1.4m×1.0m・深さ20cm弱ほどであった。集石遺構2としたが、上方の集石部はすでに破壊されている。掘り方内には貼り粘土、炭化物、焼石が認められ、やはり土坑内・上方で燃焼作業がおこなわれたと考えられる。

集石遺構1・2とも遺構の上方は破壊されているため、寸法は残存の数値である。

なお、9B区で集石遺構2のやや川上側にもう1基集石・焼石遺構（図11）があったが上部の大半が消失し掘り底の一部が残存する程度であった。

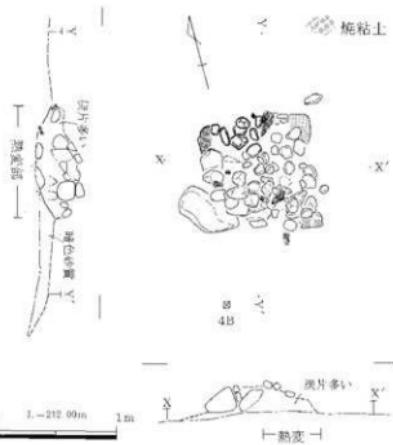


図9 集石遺構(1)

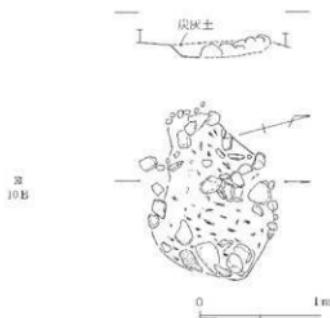


図10 集石遺構(2)

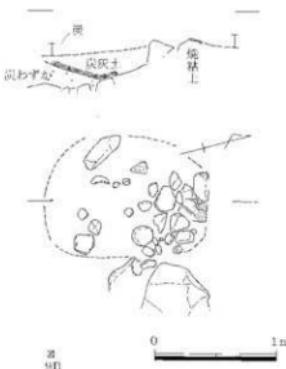


図11 集石遺構(3)



図12 Ⅱ区平面図

2) ピット群と溝状遺構 (図13)

・ P 1

6 H区の調査区北端に位置し標高は216m付近で、僅かに傾斜のある平坦面でやや黒みがかった褐色土に掘り込まれている。平面形は不整な楕円形で1.0m×0.5m・深さ60cmを測る。P 1内の側面から底面にかけては10~20cm程の結石が残存していた。覆土内に遺物は認められず、時期は不明である。

・ P 2

6 II区のP 1の内隣に位置し、標高は216m付近でP 1同様僅かに傾斜のある地面に掘り込まれている。平面形は南北方向に長い略長方形で1.1m×0.5m・深さ60cmを測る。掘り底には40cmほどの山礫が残存していた。覆土内には遺物は認められず、時期は不明である。

・ P 3

6 H区に位置し、標高216m付近で僅かに傾斜のある地面に掘り込まれる。平面形は不整な楕円形で1.2m×0.6m・深さ60cmを測る。掘り方側面には中小の山礫が詰め込まれていた。覆土中に遺物はなく、時期を特定できなかった。

・ P 4

7 H区に位置し、標高216m付近で僅かに傾斜のある地面に掘り込まれる。平面形は隅丸方形で0.9m×0.6m・深さ60cmを測る。側面には結石と思われる小礫が、底面には40cmほどの礫石とも思われる山礫が残存していた。上記同様、遺物は皆無で時期の特定には至らなかった。

P 3・P 4を連絡するように幅30cm・深さ10cm足らずの溝が認められたが、これは自然の水流跡であろう。

・ 溝状遺構

7 I区で一部は調査区外へ伸びていたため、調査区をやや拡張し検出した。標高は216.5m付近で遺構は山側をカットし、60~80cmの平坦面を造りその続きに幅20~40cm・深さ10cmほどの溝を造っている。上記のP 1~P 4同様、黒みがかった褐色土がベースである。

・ P 5

7 I区に位置し、標高217mで僅かに傾斜のある斜面に掘り込む。平面形略長円形を呈し、1.0m×0.8m・深さ約30cmを測る。底面には20cmほどの平石が遺り、中央部は5cmほどさらに掘り窪める。内からの遺物は無く、時期の特定には至らなかった。

・ P 6

8 I区に位置し、標高217mでほぼフラットな地面に掘り込む。平面形はやや丸味を帯びた方形を呈し、0.8m×0.8m・深さ30cmほどである。底面中央は10cmほどさらに掘り窪める。覆土中に遺物は無く、時期は不明である。

・ P 7

9 I区に位置し、標高217mで僅かに傾斜する斜面に掘り込む。平面形はP 6同様やや丸味を

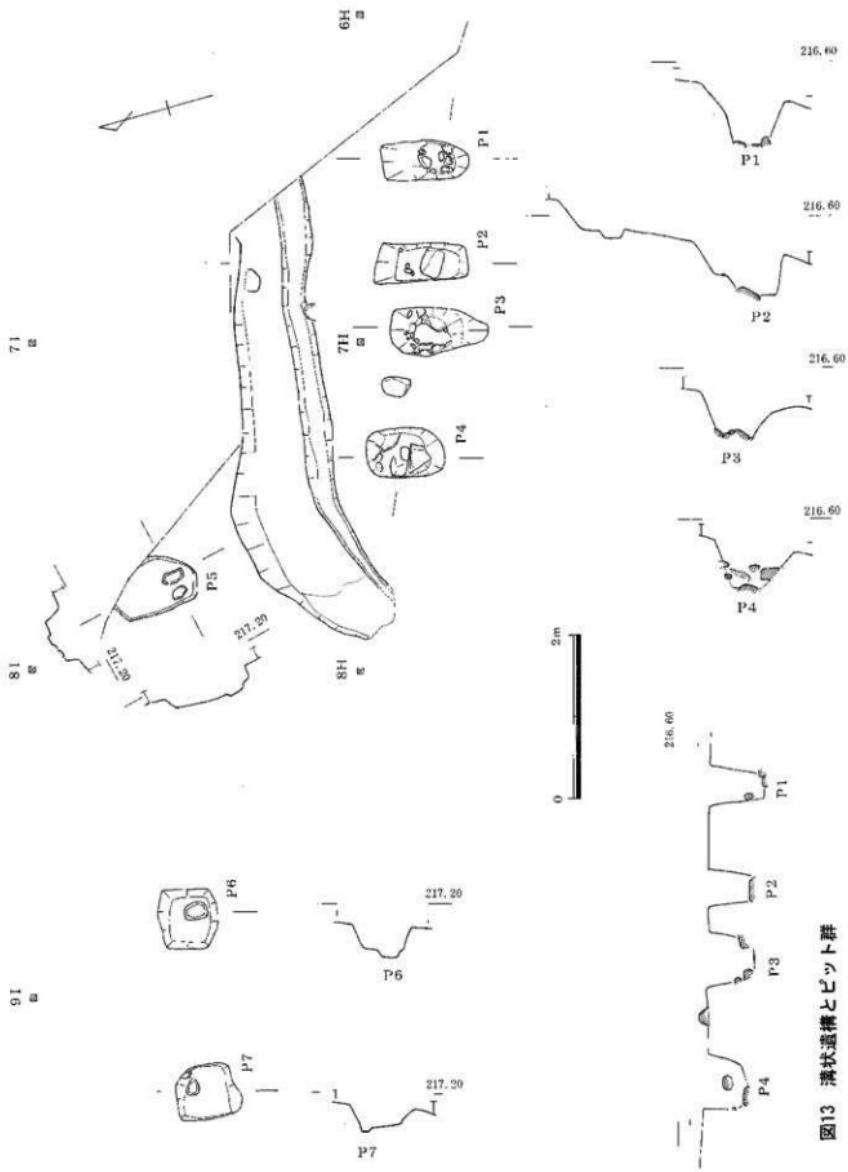


図13 溝状遺構とビット群

帯びた方形で、 $0.7m \times 0.7m$ ・深さ30cmほどである。底面の北端を5cmほど掘り窪める。覆土中に遺物はなく、時期は不明である。

P 1～P 4・溝状造構は配置や掘り込みの深さからも同時期に存在したプラン（特にP 1とP 2、P 3とP 4はセット関係だろう）である可能性が高い。ただ、P 1～P 4は列をなしているが、対になる柱穴列を検出できなかった。掘り込みは何れも斜面の高い方からのようである。P 1-P 2は1.3m、P 2-P 3は0.9m、P 3-P 4は1.6mであった。

P 5～P 7の配置は列をなしているが、対になる柱穴列は存在しなかった。ただ、柵列とするにはやや掘り方が大きい印象を受ける。掘り込みの最深部はP 5・P 6で斜面の低い方、P 7は斜面の高い方となっていて様々であるが、もし掘立柱建物跡を想定するならP 5-O-P 6-P 7の桁行3間で6.2mに復元できる。

P 1～P 7は平面プランや掘り方からすると近世・近代のものと思われる。

VI 遺物

1. 上層中の遺物

図14は、第6層（遺物包含層）より上層（主に第1・2層中）出土遺物である。

1は須恵器蓋である。口径9.8cmを測り、胎土は細砂を僅かに含み焼成は良好である。器形は丸味を帯び際だった稜をもたない。内井部は内輪へラ削り後ナデ、他は内輪ナデ調整である。^素蓋逆転する直前の出雲大谷編年VI期である。

2は4B・7B区出土。須恵質土器片で外面に格子状タタキ目をもつ壺である。還元焰焼成とタタキ目から中世の亀山系のものと思われる。

3は8B区出土。口径10.8cmを測る土師器坏である。胎土は細砂を極稀に含んでいるが焼成は

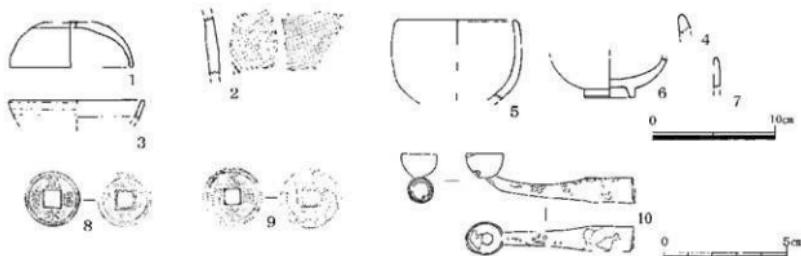


図14 上層中の遺物

良好でにぶい橙色を呈す。回転ナデ調整である。

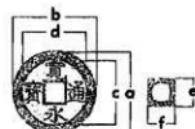
4は9C区出土。手捏ね土器の口縁片で塊型のものであろう。内・外面とも指頭圧痕が明瞭にみてとれる。

5～7は施釉陶器である。5は5C区出土で口径9.4cmを測り、内・外面とも呉須釉といわれる青釉薬を施し青緑色を呈す。呉須釉はこの付近では広瀬町の八幡焼が有名であるが、1も所謂“ぼてぼて茶碗”の類であろう。6は7G区出土。胎土は密で、にぶい橙色を呈し内・外面ともに透明釉をかける碗である。7は3II区出土で、口縁部しか残存しないが陶胎染付である。

8・9は寛永通宝で3I区・7H区出土である。詳細な寸法は観察表に載せてあるが、9は8に比べて使い込んだ鋳型で製造されている。9がやや重量が多いのは鋳彫れによるものであろう。どちらも新寛永銭である。

桶屋遺跡出土銭観察表

捕獲番号	出土区	名称	寸 法(mm)				重量(g)	備考
			a	b	c	d		
8	3I	寛永通宝	23	23	19	19	8.5	9 0.9 2.2
9	7H	寛永通宝	25	25	20	20	8	8.5 1.1 3.2



※ 山土銭の各計測位置は左図のとおりである。

10は煙管の雁首部である。残存長6.9cm、火皿部の厚さ1mmで、管の中に羅竹が残存している。火皿はやや大きめであるが、古泉弘氏のIV乃至はV段階^{第2}と思われ19世紀初頭前後の所産と考えられる。

2. 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物は、土器・石器で大半が調査区のB～Dラインの旧河岸に被る第6層（遺物包含層）中出土で、同層下端の旧河岸川縁に引っ掛かるような状況で検出した。

1) 上器

縄文土器片は3242片検出し、このうち接合・復元作業を経て図化し得たのは100点強であった。何れもB～Dラインの旧河岸に被る第6層（遺物包含層）中からで、旧河岸川縁にへばりついたような出土であった。

図15・16は有文土器または精製土器である。

1～13は磨消縄文をもつ土器片である。

1は深鉢で水平口縁上に筒状突起がつく。口縁の残存範囲をみると、その突起から90°の位置に二本の沈線の間に縄目を施す文様区画をもつ。表面の沈線は途切れがちで沈線底面は平坦で丸味を帯びない。沈線間の文様帶は狭く口縁直下から横位に繋がる。

2は精製浅鉢で底部は丸底を呈し、腰部で強く屈曲し外反しながら立ち上がり端部はやや肥厚し内湾しておさめる。低い山形口縁には内外面を貫く孔があり、頂部には沈線で渦巻文を施す。沈線は先端が丸い工具で丁寧に施し、縄文帶は幅狭、曲線的で磨消部が広く、文様内には赤色顔

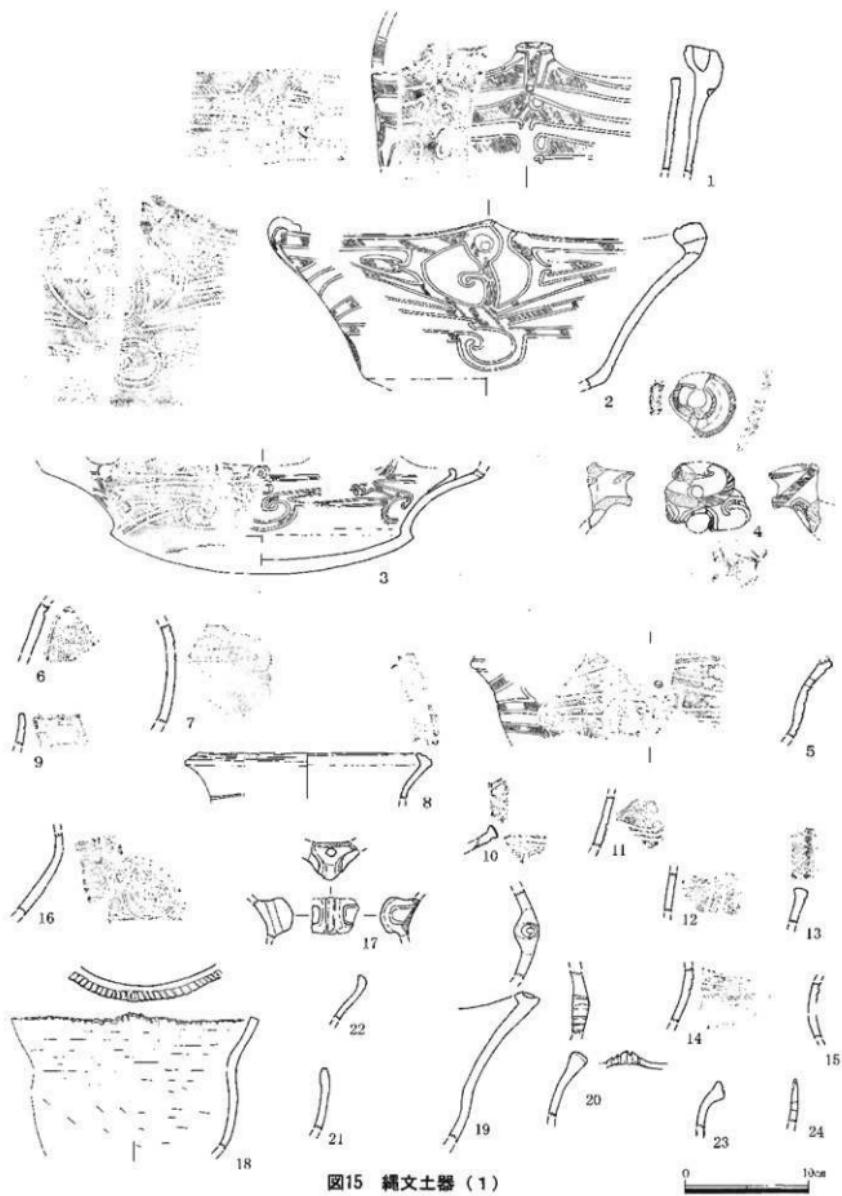


図15 縄文土器 (1)

料が塗布された痕跡がみとめられる。同様のことは3・4にもみられる。文様構成は縦に二段である。内面はきれいに磨く。3は低い波状口縁をもつ浅鉢で、残存部から6単位の波をもつものと思われる。丸底であるが2よりも底面が広く器高が低い。2同様腰部で強く屈曲、短く外反し口縁端部で内湾しおさめる。波頂部には貫通孔があり、各波間には渦巻文を施す。文様は非常に狭い縄文帯が6つの渦巻文を繋ぐように構成されているようだ。4は口縁上の渦巻状突起である。黒灰色で砂粒をやや多く含むが内外面ともきれいに磨く。縄文帯内には赤色顔料の塗布された痕跡がみられ、渦巻の三か所に孔を穿つ。深鉢になるのだろうか。

5は絡みの浅い渦巻文を狭く直線的な縄文帯が繋ぐ。沈線は深く丸断面を呈し、補修孔がある。6は粒は普通だが、撚りの弱い縄目文を施すものであるが小片のため判断しにくいものである。中期に遡るかもしれない。7は深鉢脇部で細く深い沈線で渦巻文を施す。縄目は非常に細かく繕りが強い。磨消部分が少ないのも特徴的である。8は深鉢で縁れた頸部から外反気味に立ち上がり端部で強く短く内傾しおさめる。口縁肥厚部には沈線に匣まれた狭い縄文帯が巡る。布勢式併行であろう。

9は深鉢口縁片で太く浅い沈線に撚りの弱い縄文を施すものである。10・13は何れも口縁片で口唇の文様からも同一個体である可能性が高い。深鉢であろうか。11は当遺跡で唯一の3本沈線の縄文帯をもつ土器片である。12の縄文帯の沈線は幅広で浅い。“J”字文か渦巻文の一部であろう。

14~16は縄目はみられず表面に沈線のみ施すものである。

14は細く丁寧な沈線で絡み合いが浅い。表面は縄目はみられず沈線文のみである。15は粗砂粒を含む胎上であるが内外ともきれいにミガキ、表面の沈線は太く深い。浅鉢脇部の屈曲する周辺の部位であろうか。16は表面に細く浅い沈線で同心円文と直線文が施されており、縄目はみられない。焼成が悪いためか表面が風化して摩滅氣味である。

17は無文で耳付壺の耳部片であろう。指でつまんだような形状で天地へ孔が貫通するものである。18は内外面ともナデ、赤褐色を呈す。形状は頸部で縁れ外方へ内湾しながらひろがり、3単位以下での低い山形口縁である。口唇にはキザミが巡る。19は18がさらに傾斜したような形状で内外面ともナデ、口縁には肥厚させた小突起が複数単位巡るようだ。小突起上面は梢円形に団ませる。20は縁れた頸部から短く外傾する深鉢で、内外面とも丁寧にナデる。口縁部にはやや低く肥厚させた山形口縁がみられる。その小突起上面にキザミを施すが、他の部分にはみられない。21は内湾気味に立上がる深鉢であろうか。11縁部には形の違う小突起が並び、突起間を沈線で結ぶ。外面には間隔をあけて縄目が数箇所見られる。22は無文で低い山形口縁をもつ。内外面ともナデ調整であるが、内面がやや粗く、器壁は薄手である。23は肥厚した口縁部に沈線文が施され口縁を巡るものと思われる。縁れた頸部には幅4mmで深めの沈線が縦方向にみられる。布勢式であろうか。24は口縁部のみの残りで直線的に立上がり口唇は尖る。やはり口縁は山形になるようだ。補修孔もみとめられる。

25・26は口径が大きく深い無文の精製浅鉢である。25は平底で外傾しながら直線的に立上がる。26は残存しないが底部は25と同様であろう。口縁は水平口縁であるが一部にやや肥厚させた簡易な突起をもつ。補修孔がみとめられる。以上は後期前葉（福田K II式～縁帶文期）の範疇のものであろう。

27は口縁部の小片で外面には太めの凹線がはいる。宮瀧式であろう。28は口縁部直下に貼付け突帯し細かいキザミを施す晚期突帯文土器である。口縁端部は尖り気味である。黒土B II式～沢田式の範疇であろう。

29～32は縄口若しくは撚糸が表面に施される胸部片である。29・30は撚りの大きく粗い縄文が施されるもので、31・32は撚糸文が縦走する。前者は船元期、後者は里木II式であろうか。

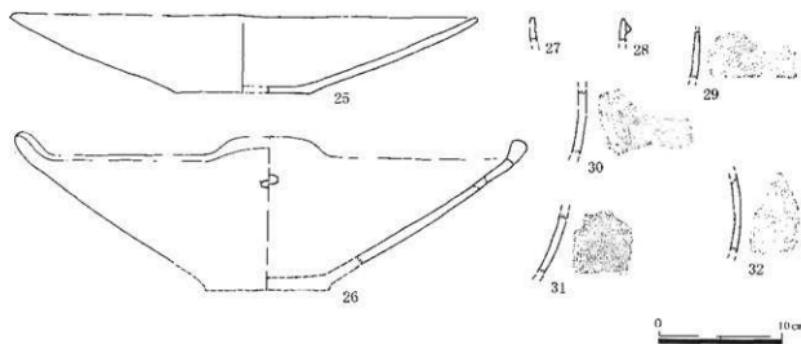


図16 縄文土器 (2)

図17～19は粗製土器である。

各個体の法状等詳細は観察表に載せてある。

1～35は調整がナデ、ケズリ等のもの。36～40は二枚貝条痕の認められるものである。

口唇部分に着口すると、面取りし平坦なもの（1～14・40）、丸味を帯びたもの（21～38）、尖るもの（39）がある。口径は15cmほどのもの（4・39）から50cmを超すもの（28）まで様々である。

器形は外傾しながら直線的に立ちあがるもの（6～11・23・29・33・36・40）、胸部で膨らみ腰部分で僅かに縮れるもの（2・4・12・19・32）小型の浅鉢状を呈すもの（3・25・26・35）等がある。

胎土・色調・器形等から8は26と、12は17と同一個体であるかもしれない。

これら粗製土器の中で外面に煤が付着したものが数点あり、補修孔と思われる焼成後穿孔も数点に認められる。

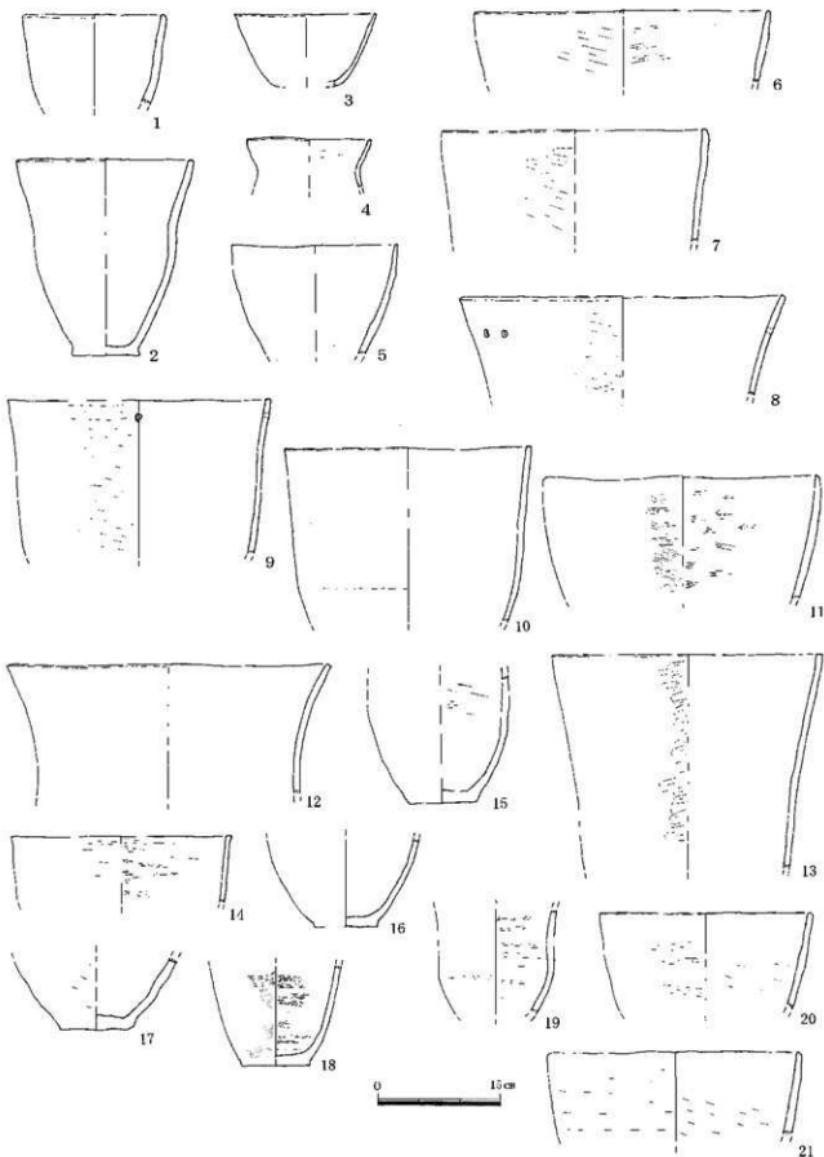


図17 縄文土器（3）

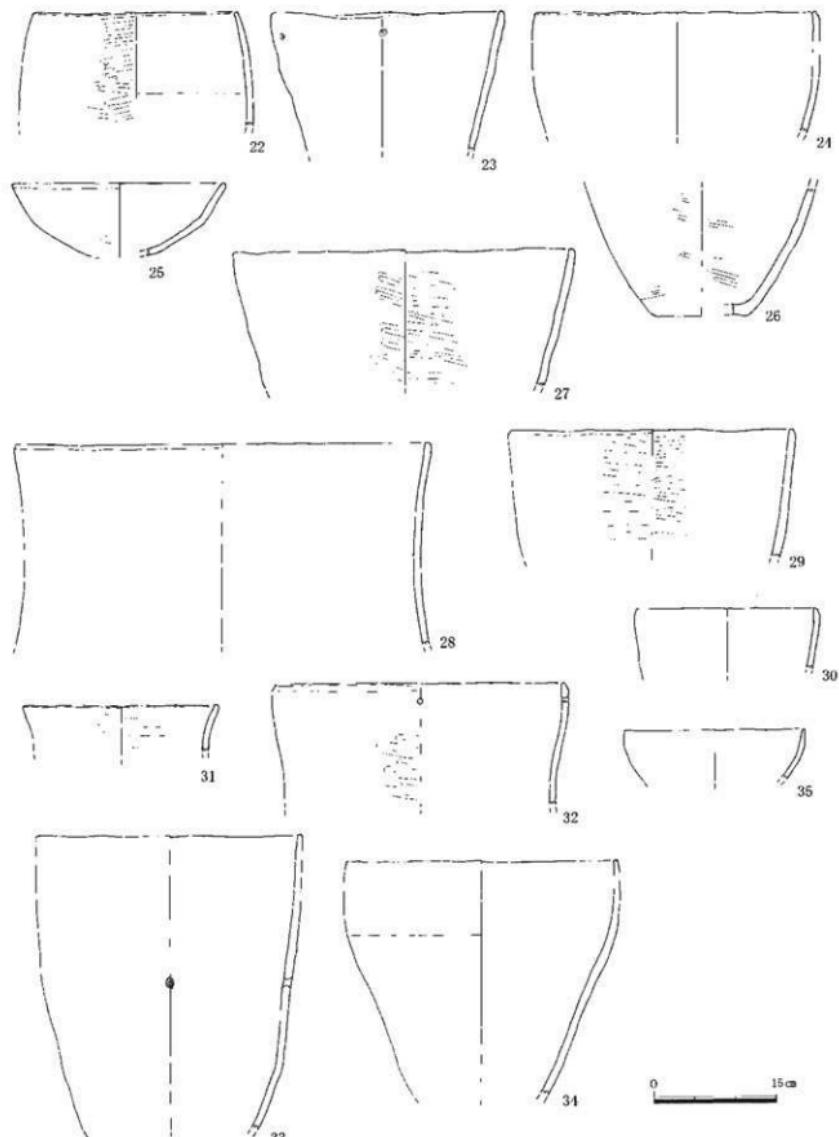


図18 縄文土器 (4)

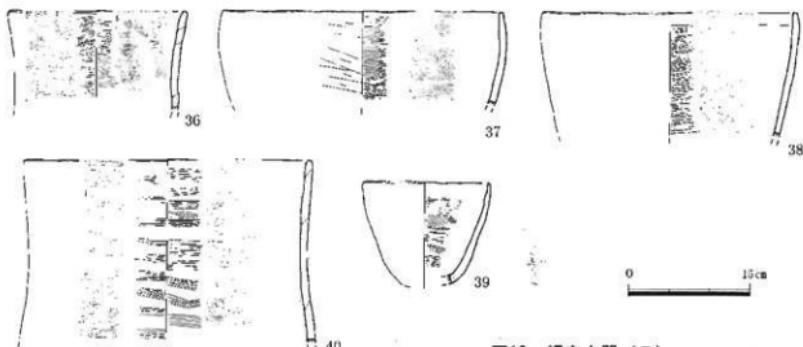


図19 繩文土器（5）

図20は縄文土器の底部である。

1～8は精製・半精製上器の底部である。

1は底径7.2cmを測り、外面は丁寧にミガキ、内面はナデるが、浅鉢であろうか。2・3は外面はナデ、内面は丁寧に磨く浅鉢で、5は内外面とも調整はナデ、指頭圧痕である。6・7は残りが悪いが、7は内外面とも丁寧に磨くものである。8は底径8.0cmを測り、外面には3本沈線の狭い縄文帯が施される磨消縄文である。沈線は幅3mm、深めでZ捻りの縄口である。以上の内4・7・8はやや凹入或は上げ底で、その他は平底である。

9～35は粗製土器の底部である。

この内のほとんどのものは深鉢であろうが、底部からの立ち上がりの残存が僅かなものがほとんどで推測の域を出ないが、なかには26・31のように明らかに浅鉢状を呈する細片も認められた。

9～28は残存部分からは平底と思われるものである。底径5.1cmほどの径の小さいもの（17）から9cmを測るやや大きめのもの（19・20・25）まである。器壁は底面は厚手で、立上がる体部では薄手になるものが多いようだ。

29～35は底面が上げ底、若しくは凹入底となるものである。

29は底径10.6cmを測り内外ともナデ、丁寧なつくりである。底部は高台様のつくりで、内面には勧斑が認められる。30～35の底面は中心あたりでやや凹入するものである。

粗製上器の底部についてはほとんどの個体は時期の決め手に欠ける。なかには後期中・後葉若しくは晩期に下るものもあるかもしれない。しかし精製上器からすると後期前葉を中心とする時期とみて大過ないだろう。

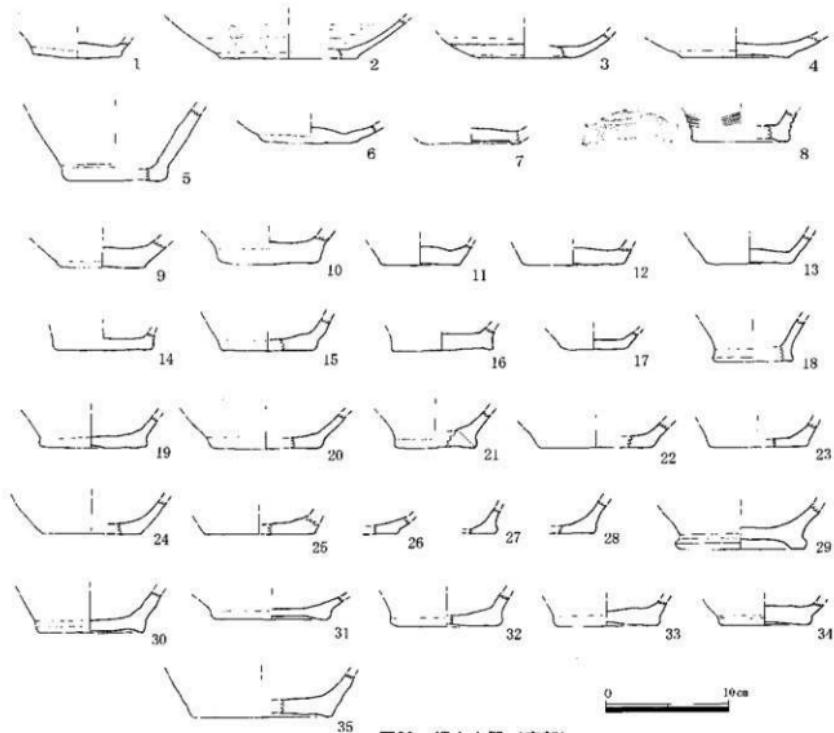


図20 縄文土器（底部）

2) 石器

石器は全部で34個体出土し、そのうち報告書で図化し得たのは31点である。

図21-1～15は石錐である。

出土した石錐すべて川礫を用いた打欠き製であり、総数15点であった。出土はやはりIH河岸ラインに沿う範囲であった。

このうち最軽量のものは1の59g、最重量のものは15の276gであった。大小・形状も様々あり、重量により大雑把に4つに分類すると小型の50～100gのものは4個（1～4）、やや小型の100～140gのものが5個（5～9）、中型の160～190gのものが5個（10～14）で15は本遺跡出土の石錐の中では一つだけ飛び抜けて重量のあるものである。15点のうち10点は長軸端を打欠き、5点は短軸端を打欠く。石材は1・5・7・10～15は砂岩、2は粒状安山岩、3・4・9は泥岩、6は閃雲花崗岩、8が石英斑岩であった。9は長軸両端を打欠くが、短軸端にも自然の

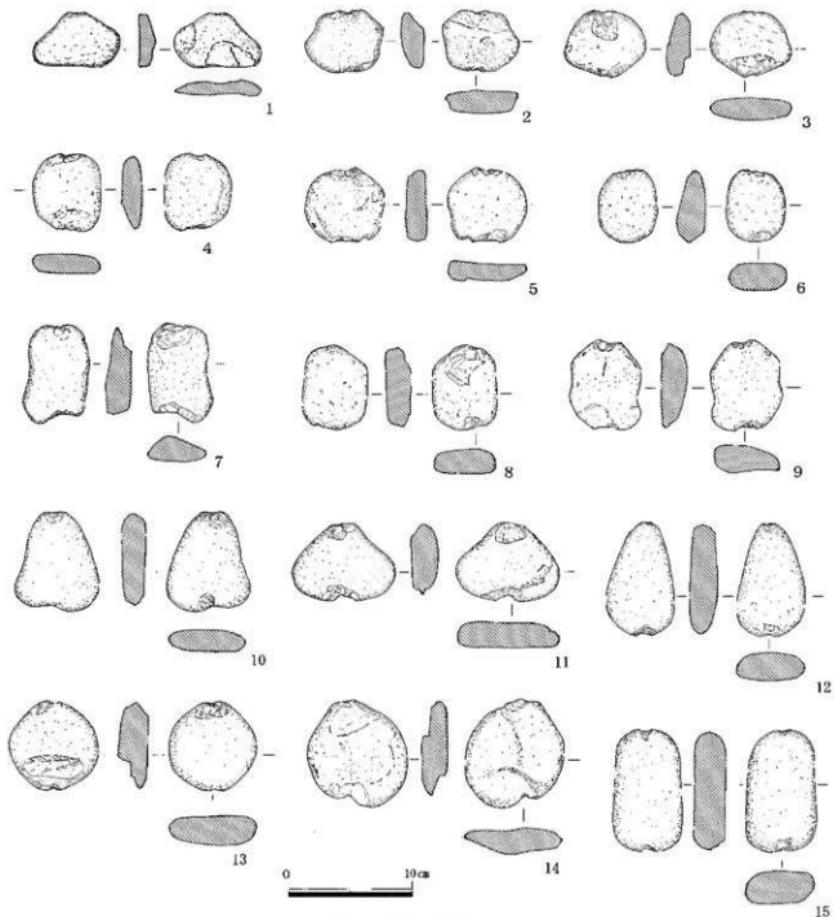


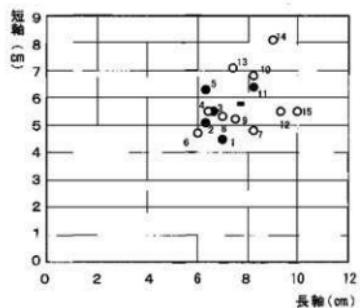
図21 石器（1）

凹部があり、四方を絞括りした可能性がある。

これら石鎌の長軸と短軸の分布、長軸と重量の相関図はグラフに示すとおりである。

本遺跡山上石鎌の長軸・短軸の平均値はそれぞれ7.6cm・5.8cmで、重量の平均は134.9gである。図によってみると総じてまとまっているようであるが、15は重量の面で唯一まとまりから飛び出し、サイズでも縦横比の数値が大きなものとなっていて、異なった用途が考えられる。

石錘の長軸・短軸



石錘の長軸と重量

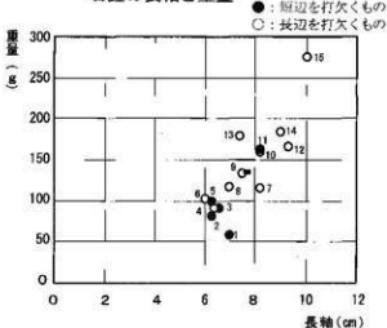


図22-16～18は打製石斧である。

16は長さ11.3 cm・幅6.4 cm・厚さ2.3 cm・重量258 gを測るほぼ光形品であるが、刃左面には大きな剥ぎ取り痕が認められ、側面、刃部には僅かに調整剝離痕がみられる。一部に研磨痕が残る。再加工中途段階であろうか。石材は泥板岩である。17は基部片で残存法量は長さ8.3 cm・幅5.6 cm・厚さ4.3 cm・重量238 gで、かなり厚みがある。片面には大きめの敲打痕が顕著で、裏面は自然面である。形状は基部から刃部にかけて拡がらないタイプのようだ。石材は泥岩である。18は長さ9.9 cm・幅4.7 cm・厚さ2.7 cm・重量63 gを測る、小型の品である。刃部は欠損しているが、欠損部に調整剝離痕がみられ再加工中途段階のようだ。基部内側に軽い剝離痕があり、僅かに抉るような形状を呈す。両面の一部にややあらい研磨面がある。石材は砂岩である。

図22-19・20は刃器である。長さ1.6 cm・幅1.4 cm・厚さ0.3 cm・重量0.5 gを測る。基部の抉り

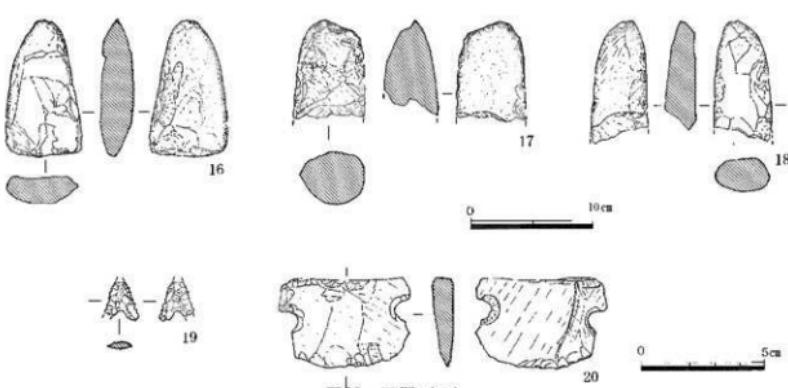


図22 石器（2）

は比較的深めで、先端部と基部の片方を欠く。側面の刃は押圧剥離により作りだし棘状を呈し、ほぼ前面を調整している。石材は安山岩系のものである。

20は石匙である。比較的整った形状のもので、刃部は緩やかな半円形で、基部に抉りが施されるものである。一面には大きな剥離面が、裏面は素材面のままである。石材は安山岩系である。

図23は剥片である。21・22・24～26・30は黒曜石の剥片である。26・30は自然のままの素材面が認められる。

23・30は安山岩系の剥片である。

27・28は水晶の剥片、31は結晶で整った六角柱状を呈すものである。

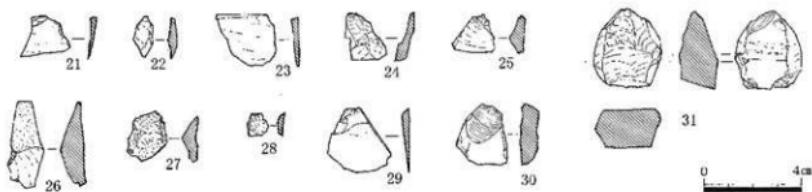


図23 石器（3）

VII 若干の考察

1. 繩文土器の出土状況について

出土した上器は、調査区南側旧河岸のやや流れの淀み状地形に上方からの流れの浸食により雪崩れ込み状に堆積した状況で、縄文時代の遺構は河川により消失して明らかにすることは出来なかつたが、極近くに遺構が存在したことは確かである。

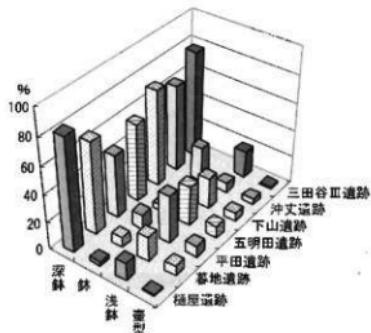
堆積していた上器は、縄文時代後期前葉～中葉である福田K2式併行～縁帶文期のものが中心で、1kmほど上流の暮地遺跡とほぼ同時期を示している。僅かばかりであるが、中期と思われる土器や晚期突帶文系土器が出上している。

本遺跡の土器組成を周辺の縄文時代後期の遺跡のそれと比べてみると。本遺跡ほか町内暮地遺跡、木次の平田遺跡、頼原の互明田遺跡、同町下山遺跡、邑智町沖丈遺跡、出雲市三田谷Ⅲ遺跡の6遺跡を比較してみた。

各遺跡出土の精製土器（磨消縄文・縁帶文）と粗製土器（後晩期）を一括して、器種別に分類したのが表1・グラフ1である。各遺跡とも当然深鉢の割合が高く、浅鉢は低い数値を示すが2番目に多い器種である。沖丈遺跡では深鉢について多いのが鉢で、浅鉢はかなり低い数値にとど

ある。鉢は調査者により項目を設けたり、深鉢、或は浅鉢に振り分けたりしているものとみられ、やや客観性に欠ける。各遺跡とも精製土器に比べ粗製土器が圧倒的に多く、また粗製土器の9割以上が深鉢であるため、器種の比較がややばやけてしまう。そこで、各遺跡の精製有文土器だけを探りあげて比較したのが表2・グラフ2である。やはり沖大遺跡では浅鉢の割合が低い。その他目につくのは、平田遺跡で深鉢より浅鉢の方が多い。これは他の6遺跡とは大きく異なり特徴的である。平田遺跡では後述する石器組成をみても、他の遺跡とは様相を異にするようだ。本遺跡は粗製を数値でみた場合には、他の遺跡と比較しても標準的な印象をうける。

各遺跡 土器組成比率



各遺跡 精製・有文土器比較

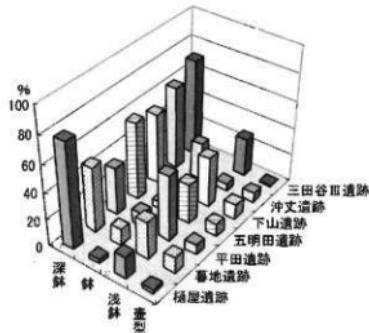


表1 土器粗製比較

() 内は個体数	深鉢	鉢	浅鉢	縁型
樋原遺跡 (71)	83	3	13	1
暮地遺跡 (389)	68	7	18	7
平田遺跡 (226)	46	11	35	8
五明田遺跡 (290)	57	5	29	9
下山遺跡 (564)	71		23	6
沖大遺跡 (263)	64	25	7	4
三田谷III遺跡 (178)	79		20	1

表中数字は%

表2 土器粗製比較（精製・有文土器）

() 内は個体数	深鉢	鉢	浅鉢	縁型
樋原遺跡 (31)	78	3	16	3
暮地遺跡 (238)	48	12	28	12
平田遺跡 (150)	35	10	48	7
五明田遺跡 (285)	57	5	29	9
下山遺跡 (331)	52		37	11
沖大遺跡 (146)	61	27	5	7
三田谷III遺跡 (92)	71		28	1

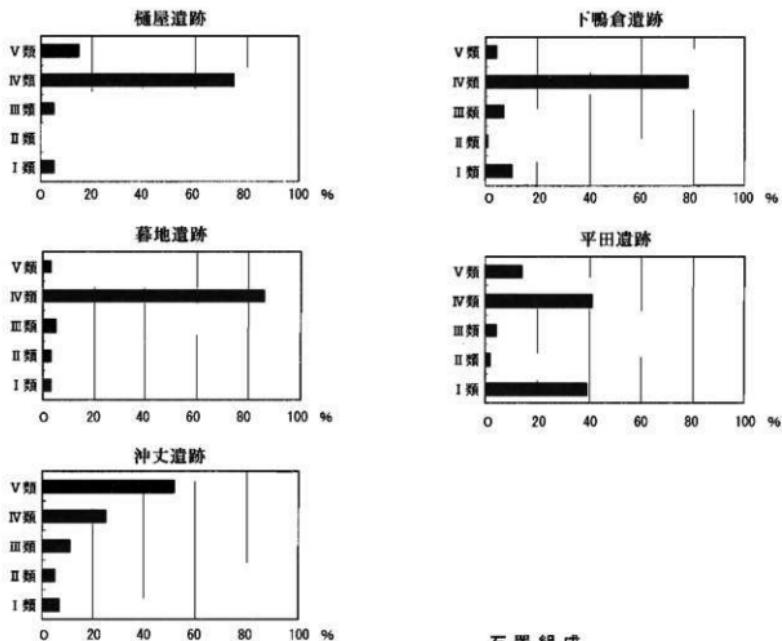
表中数字は%

2. 石器について

下記の棒グラフは、樋原遺跡と周辺の縄文遺跡の石器組成を示したものである。その内訳がⅠ類は狩猟具（石鏃）、Ⅱ類は加工具（スクレーパー類、石匙）、Ⅲ類は食物性食料加工工具（石皿、

台石、磨石・敲石)、IV類は漁労具(石錐)、V類は伐採・土掘り具(石斧)である。本遺跡出土石器は剥片を除くと総数で20点と絶対量が少ないが、周辺の遺跡と比較して暮地遺跡、下鴨倉遺跡と似通った割合を示す。下鴨倉遺跡は大量の石錐の出土と作業台と思われる石組みから、石器工房跡とされており、IV類が8割に近い。平田遺跡ではI類とIV類が40%づつで、他の遺跡と異なった割合を示す。これは、平田遺跡には第1調査区、第2調査区があり、第1調査区では他の遺跡と同様の割合を示しているのであるが、第2調査区ではI類が6割、V類が2割で(調査者は石錐、石斧の製作地とされている)あるためである。沖丈遺跡はV類の石斧が非常に高い数値を示す。

これら5遺跡は、それぞれ斐伊川本流の上・中流域とその支流である阿井川、または江の川中流域の旧河岸段丘上に立地する似通った条件であり、石器組成をみても上記の平出遺跡以外は同様の割合を示している。ただ、遺跡の時代観により当然石器組成も異なることが想われる。単純に繩文遺跡ということで比較したが、各遺跡の時期は大まかに、樋屋遺跡はほぼ後期前葉、暮地遺跡も中心となるのはほぼ後期前葉、平田遺跡はI区が後期前葉、II区が後期中葉である。下鴨倉遺跡は周知のとおり前期から晩期までの土器様式がみられ、石器についても幅広い時期を考えなければならない。



石器組成

3. 集石造構について

本遺跡で集石造構を3基検出しているが、これは近世・近代のいわゆる麻蒸し土坑と考えられる。一つはほぼ完全に消失しかけたもので、他の二つも下部構造の一端を残すのみであった。

麻蒸しは、麻の繊維を採るために皮を剥ぐ作業であり、奥出雲地域における概ねの工程^{※3}は次のようである。

- ①蒸す麻の量に応じた土坑を掘る。(大体直径5尺・深さ6尺くらい)
- ②その土坑から地表へ溝を立てる。
- ③上坑の底へ薪を積み、上に石を並べる。
- ④薪に火を付けると石が焼けてくる。
- ⑤傾きをみて溝に麻を積み、上に筵を被せ、石の上に釜を被せると釜は燃るようになる。
- ⑥釜の一部をはぐり、水をかけると蒸気が出るので蓋をする。
- ⑦この作業を繰返し、一晩おき、一日天日干した後、水に浸して皮を剥ぐ。

上記のような工程で麻の繊維を採るわけだが、蒸し桶を使用しないで石を使う方法でも様々な構造があり、原理は同じでも地域や年代による差異があるようだ。本遺跡の集石上坑では焼石・炭化物が認められ、また造構自体がまさに水辺に立地していることから、蒸気を発生させる水にも不自由しなかった。逆に言えば、僅かな増水で水を被る状況であったともいえ、下部のみの残存もうなづける。以上のような状況から集石上坑は麻蒸しを行なったものと思われる。

また、麻蒸し土坑の付近に建物跡が見つかっている遺跡が雲南地方でもあり、麻蒸し関連の作業場と考えられる^{※4}とされる遺跡もあるが、本遺跡第II調査区北端から検出した柱穴列・溝状造構も川端の麻蒸し土坑に付随した施設である可能性も否定できない。

註

※1 大谷晃二：「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌第11集』 島根考古学会 1994

2 古泉 弘：「奥津2 煙管」『汎説 江ノ考古学研究事典』 江戸遺跡研究会編 2001

3 秋山高志他：「X 農村工業」『図録 農民生活史事典』 柏書房 1979

石塚尊俊：「生業と用具」『山陰民俗叢書3』 山陰民俗学会 1995

上記の文献と「板屋III遺跡」「神原II遺跡」の報文を参考に「麻蒸し」の工程を拾いだしてみた。

4 島根県教育委員会：「板屋III遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5」 1998 P341
に「…集石土坑・粘土貼土坑に伴う3・5・10・12号掘立柱建物跡は、建物の規模が小さいこともあり、これに隣接した作業場と考えることもできる。…」とある。

参考文献

- 仁多町教育委員会：「幕地遺跡」『尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 2004
- 木次町教育委員会：「平川遺跡」『木次町文化財調査報告書 第4集』 1997
- 島根県教育委員会：「板屋Ⅲ遺跡（2）」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財調査報告書20』 2003
- 仁多町教育委員会：『下鴨倉遺跡緊急発掘調査報告』 昭和56
- 仁多町教育委員会：『下鴨倉遺跡』 1990
- 島根県教育委員会：「下山遺跡（2）」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12』 2002
- 島根県教育委員会：「楓ヶ坪遺跡」『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書3』 2004
- 島根県教育委員会：「北原本郷遺跡1」『尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書7』 2005
- 島根大学埋蔵文化財調査研究センター：「島根大学構内遺跡第11次調査（橋繩手地区2）」
- 『島根大学埋蔵文化財調査研究報告 第7冊』 2002
- 島根県教育委員会：「三田谷Ⅲ遺跡」『斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X』 2000
- 島根県教育委員会：「神原Ⅰ遺跡 神原Ⅱ遺跡」『志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書8』 2000

VIII まとめ

各章で述べてきた調査成果を列記してみる。

- ・植屋遺跡調査区内から2箇所の旧河岸跡を検出した。
- ・調査区下段の旧河岸跡に堆積した縄文土器片は、さほど移動した形跡はみられず極近くからの流込みにより堆積したものと想われ、当時、縄文人の生活の場が近くにあったことを示すものと考えられる。このことは依頼した上層鑑定からも同様の見解を得ている。
- ・出土遺物は大半が旧河岸跡からの出土で、土器は磨消縄文・縁帶文を有す縄文時代後期初頭～中葉までを中心とする時期である。細片で数量も僅かであるが、中期船元式と思われる土器や晩期突唇文系土器も出土している。石器では石錐・石斧・石鎌を検出している。石器の時期も上器同様縄文時代後期と考えて大過ないだろう。
- ・調査区下段で検出した集石遺構（うち1基はほぼ消滅）は、その構造や周辺の遺跡からみて近世・近代の麻蒸し跡と考えられる。また、第II調査区上段の柱穴列・溝状遺構は麻蒸しに伴う作業場であった可能性がある。

(野 津)

出土遺物観察表

上層出土遺物

標印番号	出土試	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	地上		外 面		内 面		備考
							形状	特徴	外 面	内 面	外 面	内 面	
14-1	牌上中	須恵器	蓋	9.8	1.8	-	縦筋を含む	-	7.3W/1(赤)	7.3W/2(赤オリーブ)	四輪ナデ ケツリ	直伝ナデ	附T
14-2	7B 4B	須恵器	蓋	-	-	-	縦筋を含む	-	5W/1(赤)	5W/1(赤)	各子供ナデ	ナデ	-
14-3	8B	土的器	灰	10.8	-	-	縦筋を横に含む	-	7.3W/2(赤に赤)	7.3W/3(赤)	四輪ナデ	四輪ナデ	-
14-4	9C	(漆器) 梱?	-	-	-	-	縦筋を含む	-	2.5W/3(赤黄)	-	ナデ	ナデ	-
14-5	3C	陶器	茶碗	9.4	1	-	蓋	-	素10W/2(赤に赤)	素10W/2(赤)	素10W/2(赤)	素10W/2(赤)	-
14-6	7G	陶器	茶碗	-	-	4.0	蓋	-	素10W/2(赤)	素10W/2(赤)	-	-	-
14-7	3H	陶器	茶碗	-	-	-	蓋	-	7.3W/1(赤)	10W/2(赤)	素10W/2(赤)	素10W/2(赤)	-

縄文有文土器

標印番号	出土試	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	新文		新七		外 面		内 面		備考
							縫合	底合	縫合	底合	外 面	内 面	外 面	内 面	
15-1	8C 9C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	7.3W/4(赤に赤)	10W/2(赤に赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-2	9C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	7.3W/6(赤)	10W/2(赤)	素泊縄文	ナデ	赤色顔料痕
15-3	8C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	10W/2(赤に赤)	10W/2(赤)	素泊縄文	カギ	赤色顔料痕
15-4	9C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	10W/2(赤)	10W/2(赤)	素泊縄文	カギ	赤色顔料痕
15-5	9B 10C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	10W/2(赤に赤)	10W/2(赤)	素泊縄文	ナデ	補修孔あり
15-6	9C 10C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	4mm	砂粒を含む	-	10W/6(赤に赤)	-	素泊縄文	ナデ	-
15-7	9B	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	2mm	砂粒を含む	-	10W/6(赤に赤)	10W/6(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-8	9H	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	10W/7(赤に赤)	10W/4(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-9	10C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	4mm	縦筋を含む	-	10W/6(赤に赤)	-	素泊縄文	カギ	-
15-10	10C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	2.5W/6(赤)	-	素泊縄文	ナデ	13と同・か
15-11	9H	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	10W/5(赤に赤)	10W/4(赤)	素泊縄文	ナデ	3本板縫
15-12	8C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	4mm	縦筋を含む	-	5W/5(赤)	5W/6(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-13	9H	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	5W/5(赤)	5W/6(赤)	素泊縄文	ナデ	10と同・か
15-14	10C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	10W/6(赤に赤)	10W/5(赤)	素泊縄文	カギ	縫合孔あり
15-15	9H	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	4mm	縦筋を含む	-	5W/5(赤)	5W/6(赤)	素泊縄文	カギ	-
15-16	10C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	10W/4(赤)	10W/3(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-17	9A	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	2.5W/7(赤)	5W/7(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-18	8C 10C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	2.5W/5(赤)	5W/5(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-19	10B 10C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	10W/6(赤)	10W/5(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-20	9H	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	4mm	縦筋を含む	-	5W/5(赤)	5W/6(赤)	素泊縄文	カギ	-
15-21	10C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	縦筋を含む	-	10W/6(赤)	10W/5(赤)	素泊縄文	ナデ	口輪にキズ
15-22	10C	縄文	後期縫鉢	-	-	-	Z	2mm	砂粒を含む	-	10W/5(赤)	5W/4(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-23	9B 9C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	砂粒を含む	-	2.5W/7(赤)	2.5W/7(赤)	素泊縄文	ナデ	ナデ
15-24	10B	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	砂粒を含む	-	2.5W/6(赤)	2.5W/6(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-25	9H 9C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	砂粒を含む	-	7.3W/2(赤)	7.3W/2(赤)	素泊縄文	カギ	-
15-26	8C 9H 10C	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	砂粒を含む	-	10W/2(赤)	10W/1(赤)	素泊縄文	カギ	補修孔あり
15-27	9H	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	砂粒を含む	-	10W/2(赤)	10W/1(赤)	素泊縄文	カギ	-
15-28	9A	縄文	縫製深鉢	-	-	-	Z	3mm	砂粒を含む	-	10W/7(赤)	10W/4(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-29	10C	縄文	中期縫鉢	-	-	-	Z	3mm	砂粒を含む	-	2.5W/4(赤)	2.5W/5(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-30	9H	縄文	中期縫鉢	-	-	-	Z	3mm	砂粒を含む	-	10W/2(赤)	7.3W/6(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-31	10C	縄文	中期縫鉢	-	-	-	S	-	砂粒を含む	-	10W/3(赤)	10W/3(赤)	素泊縄文	ナデ	-
15-32	9B	縄文	中期縫鉢	-	-	-	S	-	砂粒を含む	-	10W/2(赤)	10W/2(赤)	素泊縄文	カギ	-

縄文粗製土器

標本番号	出土区	種類	器種	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	縄文		縄文		縄文		備考
							内面	外面	内面	外面	内面	外面	
17-1	9C	調文	粗製深鉢	17.0			縄文を含む		5105/6(底面削除)		ケズリ	ナダ	
17-2	8C 10C	調文	粗製深鉢	22.0	24.1	8.0	縄文を含む		5105/4(底面削除) ~7/2(底面)	5104/2(底面削除) ~7/2(底面)	ケズリ	ナダ	
17-3	8C 9C	調文	粗製浅鉢	17.0			縄文を含む		5105/6(底面削除) ~7/2(底面)	5104/2(底面削除) ~7/2(底面)	ケズリ	ナダ	
17-4	10C	調文	粗製深鉢	15.0			縄文を含む		7.5107/4(底面削除) ~6/1(底面)	7.5108/3(底面削除)	ケズリ板ナダ	ナダ	
17-5	9B	調文	粗製深鉢	20.0			縄文を含む		5108/2(底面削除) ~7/2(底面)	5107/4(底面削除)	ナダ	ナダ	焼付青
17-6	9B 10C	調文	粗製深鉢	36.0			縄文を含む		5108/4(底面削除)	5108/6(底)	ナダ	ナダ	焼付青
17-7	10B	調文	粗製深鉢	36.0			縄文を含む		5107/4(底面削除)	5108/6(底)	ケズリ	ナダ	
17-8	9C 10C	調文	粗製深鉢	30.0			縄文をやや多く含む		5108/4(底面削除) ~7/2(底面)	5107/4(底面削除) ~7/2(底面)	ナダ	ナダ	焼付あり 26と火一か
17-9	10B 10C	調文	粗製深鉢	32.0			縄文をやや多く含む		5107/4(底面削除) ~7/2(底面)	5107/2(底面削除) ~6/2(底面)	ケズリ	ナダ	焼付あり
17-10	9C 10B 10C	調文	粗製深鉢	30.0			縄文をやや多く含む		2.5108/4(底面削除) ~6/2(底面)	5108/2(底面削除) ~6/2(底面)	ケズリ	ナダ	
17-11	9B 10B 10C	調文	粗製深鉢	34.0			縄文をやや多く含む		5107/6(底面削除) ~6/2(底面)	5107/6(底)	ケズリ	ナダ	
17-12	10C	調文	粗製深鉢	40.0			縄文をやや多く含む		7.5107/4(底面削除)	10/507/2(底面削除) ~6/2(底面)	都原	ナダ	焼付あり 17ト火一か
17-13	9C	調文	粗製深鉢	29.8			縄文を含む		10/507/3(底面削除)	10/508/3(底面削除)	ナダ	ナダ	下火なナダ
17-14	8C	調文	粗製深鉢	17.0			縄文を含む		7.5108/2(底面削除) ~7/1(底面)	7.5108/2(底面削除)	ケズリ	ナダ	
17-15	8C	調文	粗製深鉢				7.9 細縄を含む		7.5107/4(底面削除)		ナダ	ナダ	
17-16	10C	調文	粗製深鉢				7.6 細縄をやや多く含む		5108/6(底) ~4/2(底面)		ナダ	ナダ	
17-17	9C	調文	粗製深鉢				9.0 細縄をやや多く含む		10/507/6(底面削除) ~6/2(底面)	2.5108/3(底面削除) ~6/2(底面)	ケズリ後ナダ	ナダ	
17-18	8B 8C 9C 10C	調文	粗製深鉢				8.2 細縄をやや多く含む		7.5108/6(底面削除) ~6/2(底面)	7.5108/4(底面削除)	ケズリ	ナダ	
17-19	9B	調文	粗製深鉢				縄文を含む		5106/4(底面削除) ~6/2(底面)	5106/4(底面削除) ~6/2(底面)	ナダ	ナダ	
17-20	9A 9D	調文	粗製深鉢	36.0			縄文を含む		7.5107/3(底面削除)		ケズリ	ケズリ後ナダ	
17-21	9C 10C	調文	粗製深鉢	32.0			縄文を僅かに含む		2.5107/2(底面削除) ~6/2(底面)	10/508/2(底面削除)	ケズリ	ナダ	
18-22	10B 10C	調文	粗製深鉢	25.0			縄文をやや多く含む		10/508/4(底面削除)		ケズリ	ケズリ	
18-23	10B	調文	粗製深鉢	30.0			縄文をやや多く含む		10/507/6(底面削除) ~6/3(底面)	5106/6(底面削除) ~6/4(底面)	ケズリ	ナダ	
18-24	10H	調文	粗製浅鉢	34.0			縄文を含む		10/507/3(底面削除)	7.5108/6(底)	ケズリ	ナダ	
18-25	9C	調文	粗製浅鉢	26.0			縄文を含む		5106/6(底) ~2.5107/4(底面)		ケズリ	ナダ	
18-26	8C	調文	粗製深鉢			11.0	周砂粒を盛り込む		10/507/6(底面削除)	7.5107/6(底)	ケズリ後ナダ	ケズリ後ナダ	
18-27	8C 10C	調文	粗製深鉢	42.0			周砂粒を含む		7.5108/4(底面削除) ~6/4(底面)	10/508/4(底面削除)	ケズリ後ナダ	ナダ	
18-28	8C 9B 9C 10C	調文	粗製深鉢	51.0			周砂粒を僅かに含む		10/508/2(底面削除) ~6/2(底面)	10/508/2(底面削除) ~6/4(底面)	ケズリ	ナダ	
18-29	9B 10C	調文	粗製深鉢	34.4			砂粒をやや多く含む		10/507/4(底面削除) ~5/2(底面)	2.5107/4(底面)	ケズリ	ナダ	
18-30	10C	調文	粗製深鉢	22.0			細縄を含む		10/508/2(底面削除) ~5/2(底面)	2.5107/2(底面削除)	ケズリ	ケズリ	
18-31	10C	調文	粗製深鉢	24.0			砂粒を含む		5106/6(底)	5106/6(底)	ケズリ	ナダ	
18-32	9C	調文	粗製深鉢	32.0			砂粒を含む		7.5108/5(底面削除)	10/507/3(底面削除) ~6/2(底面)	ケズリ	ケズリ後ナダ	
18-33	10B	調文	粗製深鉢	32.5			砂粒を多く含む		10/508/3(底面削除) ~6/1(底面)	2.5108/2(底面) ~6/2(底面)	ケズリ	ナダ	焼付あり
18-34	8C 9B 10C	調文	粗製深鉢	33.4			砂粒をやや多く含む		10/508/3(底面削除)		相痕	ナダ	
18-35	9B	調文	粗製鉢	22.0			相砂粒をやや多く含む		10/508/3(底面削除)		ナダ	ナダ	
19-26	9B 9C	調文	粗製深鉢	21.0			砂粒を含む		5107/4(底面削除) ~5/1(底面)	7.5108/4(底面削除) ~5/2(底面)	二枚貝殻	二枚貝殻	
19-37	8C	調文	粗製深鉢	30.0			相砂粒を含む		7.5108/4(底面削除) ~6/3(底面)	5108/6(底)	ケズリ	二枚貝殻	
19-38	9C	調文	粗製深鉢	29.0			相砂粒を含む		5107/6(底面削除) ~5/2(底面)	7.5108/6(底)	ナダ	一枚貝殻	
19-39	9C 10C	調文	粗製深鉢	15.5			砂粒をやや多く含む		10/508/3(底面削除) ~6/2(底面)	7.5107/3(底面削除) ~6/2(底面)	ケズリ	一枚貝殻	
19-40	8C 10B 10C	調文	粗製深鉢	35.0			砂粒を含む		10/507/3(底面削除) ~6/2(底面)	10/508/3(底面削除) ~6/2(底面)	一枚貝殻	一枚貝殻	

縄文土器底部

件番号	出土区	種類	口径 (cm)	脚高 (cm)	底径 (cm)	縁目	底面 太さ (mm)	輪文		色		測定		備考
								内面	外面	内面	外面	内面	外面	
20-1	4G	縄文 粗製底部			7.4			縦目 横目 砂粒 を含む	7. GVR7/2(灰黒) ~6/3(にぶい、黒) ~6/1(黒)	7. SRV7/6(灰黒) ~6/1(にぶい、黒) ~6/1(黒)	ミガキ	ナデ		
20-2	NC	縄文 粗製 底部			11.0			縦目 横目 砂粒 を含む	2. SVR7/2(灰黄) ~7. SRV7/1(にぶい、黒) ~7. SRV7/2(にぶい、黒)	2. SVR7/2(灰黄) ~7. SRV7/1(にぶい、黒) ~7. SRV7/2(にぶい、黒)	ナデ	ミガキ		
20-3	9B	縄文 粗製 底部			8.0			縦目 横目 砂粒 を含む	10VR7/3(にぶい、黒) ~7. SRV7/6(黒)	2. SVR7/6(灰黒) ~7/2(灰黒)	ナデ	ミガキ		
20-4	8B 9A	縄文 粗製 底部			8.7			縦目 横目 砂粒 を含む	2. SVR7/1(灰黄) ~7. SRV7/6(黒)	2. SVR7/1(灰黄) ~7. SRV7/6(黒)	ナデ	ナデ	陷入底	
20-5	8C	縄文 粗製 底部			8.0			縦目 横目 砂粒 を含む	2. SVR7/6(灰黒) ~7. SRV7/4(にぶい、黒)	2. SVR7/2(灰黒) ~7. SRV7/4(にぶい、黒)	ナデ	ナデ	指面正極	
20-6	9B	縄文 粗製 底部			7.3			縦目 横目 砂粒 を含む	2. SVR7/1(灰黄) ~7/2(灰)	2. SVR7/2(灰黒) ~7/2(灰)	ナデ	ナデ	腹底あり	
20-7	9B	縄文 粗製底部						縦目 横目 砂粒 を含む	10VR7/1(灰黄)	10VR7/1(灰黄)	ミガキ	ミガキ		
20-8	9B	縄文 粗製底部			8.0	Z	3mm	袋 微細	10VR7/2(灰黒) ~7/2(灰)	10VR7/2(灰黒) ~7/2(灰)	滑溜な 面	ナデ	3本沈	
20-9	9B	縄文 粗製底部			7.0			縦目 横目 砂粒 を含む	10VR7/4(にぶい、黒)	10VR7/4(にぶい、黒) ~SVR7/1(灰)	ナデ	ナデ	(指面)	
20-10	8B	縄文 粗製底部			8.0			縦目 横目 砂粒 を含む	2. SVR7/6(黒) ~7/4(にぶい、黒)	7. SRV7/7(黒) ~7/3(にぶい、黒)	ナデ	ナデ		
20-11	10B	縄文 粗製底部			6.1			縦目 横目 砂粒 を含む	7. SRV7/3(にぶい、黒)	7. SRV7/6(黒) ~8/2(灰)	ナデ	ナデ		
20-12	8C	縄文 粗製底部			8.2			縦目 横目 砂粒 を含む	7. SRV7/7(黒) ~8/2(灰)	2. SVR7/4(灰) ~10VR7/4(にぶい、黒)	ナデ	ナデ		
20-13	10C	縄文 粗製底部			6.6			縦目 横目 砂粒 を含む	7. SRV8/4(にぶい、黒) ~8/2(灰)	7. SRV8/4(にぶい、黒) ~8/2(灰)	ナデ	ナデ		
20-14	10C	縄文 粗製底部			7.9			縦目 横目 砂粒 を含む	7. SRV8/4(灰黒) ~8/4(灰)	10VR8/4(灰黒) ~7/2(にぶい、黒)	ナデ	ナデ		
20-15	9B	縄文 粗製底部			7.6			縦目 横目 砂粒 を含む	10VR7/3(にぶい、黒)	10VR7/4(にぶい、黒)	ナデ	ナデ		
20-16	9B	縄文 粗製底部			8.2			縦目	10VR8/3(浅黃色)	10VR8/6(黒) ~5/6(ナーブ)	ナデ	ナデ		
20-17	10B	縄文 粗製底部			5.1			微細	10VR8/3(浅黃色) ~7/1(灰)	2. SVR7/3(灰) ~7/1(灰)	ナデ	ナデ		
20-18	10B	縄文 粗製底部			6.6			砂粒を含む	10VR7/2(にぶい、黒)	10VR8/6(黒) ~7/3(ナーブ)	ナデ	ナデ		
20-19	10B	縄文 粗製底部			9.0			粗砂粒を含む	7. SRV7/3(灰) ~9/2(灰)	10VR8/3(浅黃色)	ナデ	ナデ	指面平滑	
20-20	9A	縄文 粗製底部			9.0			砂粒	2. SVR7/3(灰) ~9/1(灰)	7. SRV7/6(黒) ~8/1(灰)	ナデ	ナデ	腹底あり	
20-21	10C	縄文 粗製底部			6.4			砂粒を含む	7. SRV8/6(灰黒)	12. ENT/2(灰)	ナデ	ナデ		
20-22	9B	縄文 粗製底部			9.0			砂粒を含む	2. SRV8/6(灰)	2. SRV8/6(灰)	ナデ	ナデ		
20-23	10C	縄文 粗製底部			8.0			砂粒を含む	10VR7/3(にぶい、黒)	10VR7/3(にぶい、黒)	ナデ	ナデ	(一部 貝殻混入)	
20-24	10C	縄文 粗製底部			8.0			砂粒を含む	7. SRV7/3(にぶい、黒) ~10VR7/3(灰黒)	10VR7/3(にぶい、黒)	ナデ	ナデ		
20-25	9B	縄文 粗製底部			9.0			砂粒を含む	7. SRV7/6(灰)	7. SRV7/6(黒)	ナデ	ナデ		
20-26	9A	縄文 粗製底部			15.0			砂粒を含む	5VRG/3(にぶい、黒)	10VR7/1(灰)	ナデ	ナデ		
20-27	9A	縄文 粗製底部			9.0			砂粒を含む	10VR8/2(灰黒)	10VR8/4(灰黒)	ナデ	ナデ		
20-28	9B	縄文 粗製底部			10.0			砂粒を含む	7. SRV7/3(にぶい、黒)	7. SRV7/3(にぶい、黒)	ナデ	ナデ		
20-29	10B	縄文 粗製底部			10.6			砂粒を含む	10VR7/2(にぶい、黒)	10VR8/2(灰)	ナデ	ナデ	腹底あり	
20-30	9C	縄文 粗製底部			8.6			砂粒を含む	10VR7/4(にぶい、黒)	10VR7/4(灰)	ケズリ	ナデ		
20-31	8C	縄文 粗製底部			9.0			砂粒を含む	7. SRV7/2(にぶい、黒)	7. SRV7/6(黒)	ナデ	ナデ		
20-32	7B	縄文 粗製底部			9.0			砂粒を含む	2. SRV8/6(灰)	2. SRV8/4(灰)	ナデ	ナデ		
20-33	7A	縄文 粗製底部			8.4			砂粒を含む	10VR7/3(にぶい、黒) ~8/3(灰黒)	2. SRV7/8(灰) ~5/1(灰)	ナデ	ナデ		
20-34	10C	縄文 粗製底部			7.2			砂粒を含む	7. SRV8/6(灰黒) ~9/1(灰)	7. SRV8/6(灰) ~10VR7/3(にぶい、黒)	ナデ	ナデ		
20-35	9C	縄文 粗製底部			11.4			砂粒を含む	7. SRV8/6(灰黒) ~9/1(灰)	7. SRV8/4(にぶい、黒) ~10VR7/3(にぶい、黒)	ナデ	ナデ		

石 器

器物番号	出土場所	種別	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	性 質
21-1	16C	石鏟	4.5	7.0	1.2	59	砂岩	
21-2	8C	石鏟	5.1	6.3	1.9	82	純状安山岩	
21-3	10C	石鏟	6.5	6.6	1.3	91	花崗岩	
21-4	8C	石鏟	6.4	5.5	1.6	91	花崗岩	
21-5	4H	石鏟	6.3	6.3	1.4	100	砂岩	
21-6	18C	石鏟	6.0	4.7	2.3	109	閃雲花崗岩	
21-7	3C	石鏟		8.2	4.8	2.1	116	砂岩
21-8	9B	石鏟	7.0	5.3	2.0	117	石英斑岩	
21-9	18C	石鏟	7.5	5.2	2.3	134	花崗岩	
21-10	9B	石鏟	8.2	6.8	1.75	160	砂岩	
21-11	18C	石鏟	6.4	8.2	2.1	163	砂岩	
21-12	18C	石鏟	9.3	5.5	2.3	166	砂岩	
21-13	2B	石鏟	7.4	7.1	2.3	180	砂岩	
21-14	10H	石鏟	9.0	6.1	2.1	185	砂岩	
21-15	3C	石鏟	10.0	5.5	2.5	276	砂岩	
22-16	9H	打制石斧	11.3	6.4	2.3	258	泥板岩	
22-17	16C	打制石斧	8.3	5.6	4.3	238	花崗岩	
22-18	4B	打制石斧	9.0	4.7	2.7	63	花崗岩	
22-19	8B	石鏟	1.6	1.4	0.3	0.5	安山岩	
22-20	4H	石砍刀	3.5	5.3	0.8	20	安山岩	
23-21	9I	刮片	21	15	2.6	0.75	黑曜石	
23-22	19C	刮片	17.5	7	3.8	0.5	黑曜石	
23-23	9C	刮片	22	20	4.1	2.2	安山岩	
23-24	8C	刮片	21	14	4.4	1.1	黑曜石	
23-25	10C	刮片	15	15	4.7	1.2	黑曜石	
23-26	8C	刮片	36	14	8.6	2.9	黑曜石	
23-27	9C	刮片	20	15	6.0	1.6	水晶	
23-28	9C	刮片	9	8	2.6	0.25	石英	
23-29	9C	刮片	26	26	3	1.6	安山岩	
23-30	6G	刮片	25	21	7	4.8	黑曜石	灰T
23-31	7H	刮片	33	27	15	17.8	水晶	

島根県仁多町樋屋遺跡の基本土層序に関する調査報告

島根大学総合理工学研究科マテリアル創成工学専攻

立石 良

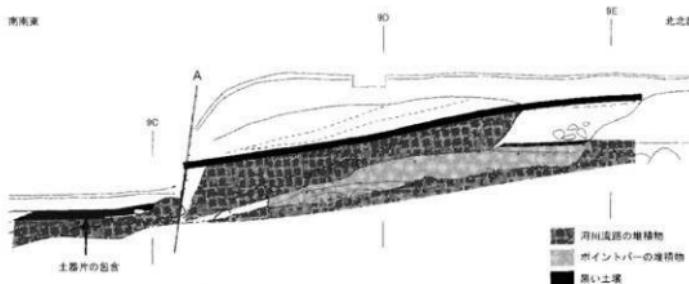
仁多町教育委員会の要請により、平成16年8月27日に、仁多町地内の樋屋遺跡発掘調査現場において簡易な層序調査を行った。ここに結果を報告する。

1. 調査地域

今回調査したのは島根県仁多町馬馳の斐伊川流域の発掘現場で、9ラインと番号がつけられた断面に沿った範囲である。9ラインは北北西—南南東方向の断面で、標高は北—南で218.8m—212.7mと谷方向に緩く傾斜する地形を示す。

2. 調査地域の岩相

調査地域には、主に斐伊川由来とみられる礫・砂・泥からなる堆積物が約3mの厚さで堆積する。9ラインの断面では、最下位に直径20—50cmほどの亜角礫～亜円礫層が谷に向かって傾斜した形で分布している。しかし、地点9C付近を境に、北側と南側で礫層の基質部の岩相および礫層の上位の岩相が異なっている(図1のA)。南側では礫層の基質部は灰色のシルトで、その上位では灰色～黒灰色のシルト層が細～中粒砂との平行な層理面を形成し、約50cmの厚さで堆積する。なお、土器片はこの黒いシルト層中で産出する。直径20cm程の比較的大きな土器片が疊に張り付くような形で保存されている様子がみられた。南側ではこれより上位では特徴的な黒い土壤が分布する。北側では礫層の基質部は中～粗粒砂で、その上位には灰白色のシルト層や中粒砂層が最大80cmほどの厚さで堆積する。中粒砂層中には大型の斜交した層理面が認められた。また、これ



付図1：スケッチをもとにした簡易な堆積相分布図

らの砂層・シルト層は山側に向かって厚くなる。その上位には直径5~15cmほどの亜円礫層が最大1m程の厚さで下位層を削りこんで分布する。この礫層も山側に向かって厚くなる。この礫層の上位には特徴的な黒い土壌、塊状の砂、表層の土壌が堆積する。

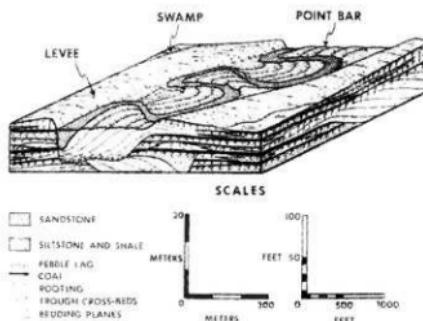
3. 岩相の解釈

上記のような観察で得られた堆積物の特徴や内部に見られる堆積構造、地層の側方、上方への変化などの情報から、垂直方向の堆積環境の変遷を考察する。まず、地層中から土器片が見つかっていることから、この地域の地層が全体として比較的新しい堆積物であることが分かる。このことは、堆積物が現在とほぼ同じような環境、すなわち河川の働きによって運搬されたものと考えられる。また、堆積物自体も河川堆積物に特徴的なものが多く認められる。一般的な蛇行河川の主要な地形要素は、流路、砂州、自然堤防、後背湿地の4つである(図2)。

上記の岩相の中で、例えば下部の礫層に関しては、インプリケーションと呼ばれる構造が見られたため、河川の流路内の堆積物である可能性が高い。インプリケーションとは、運搬された礫がある程度の方向性を示す構造のことで、一方向の流れの影響を受けたものであることがわかる。北側上部の礫層の一部も同様の構造を示すため、流路の堆積物と解釈した。

北側の下部・上部の礫層に挟まれた斜交層理をもつ砂層、シルト層は、ポイントバーの堆積物と考えられる。ポイントバーとは、蛇行河川の流路の移動に伴い形成される砂州のことで、その堆積物は淘汰がよく、側方に成長するため斜交層理をもつことが知られている(図2)。

今回はそれほど広い範囲を調査したわけではないので、自然堤防の堆積物や後背湿地の堆積物は認められなかった。また、地点9C付近で大きく岩相が変化するのは、河岸段丘の形成によるものと思われる(図1)。すなわち、北側(山側)の下部の礫層から上部の礫層までの堆積物がたまつた後に、南側で河谷浸食が起き、その後南側で新しい河川堆積物が堆積した。そして、黒い



付図2：蛇行河川の堆積環境 (Niern et al., 1978より引用)

土壌が両者を覆い、現在見られるような地層の重なりができたと考えられる。ここで、段丘で分けられた新旧の河川流路について考察する。

北側と南側での河川堆積物の最大の違いは、ポイントバー堆積物の有無である（図1）。これはおそらく、段丘が形成され、河川がより深く谷を浸食したため、より狭い範囲でしか蛇行できなかつたためではないかと思われる。言い換えれば、北側の河川はより自由度の高い蛇行河川だった、と考えることができる。

最後に、上器片の出土する層準について考察する。土器片は段丘斜面のそばで出土している。このことから、土器がたまたま当時の様子を考えると、北側には段丘堆積物の高まりがあり、南側には河川流路がある。その河川流路の端の浅いところに土器片がたまる、というようなかたちを想像することができる。上器片の大きさは小さいもので5cm、大きいものでは30cmほどであった。大きいもののサイズから見て、その場で捨てられたか、運搬されたとしてもそれほど長い距離ではないと見ることができる。

4.まとめ

島根県仁多町樋屋遺跡で簡易な層序調査を行った。その結果、以下のことが分かった。

- ・地層を構成する堆積物は主に蛇行河川の堆積物からなる。
- ・北側／南側は段丘面で境される。
- ・土器片は段丘形成後の河川流路の端から出土している。
- ・このことから土器片は上流から運搬され、流れの弱い流路の端で止まったか、もともと近くで捨てられたか、どちらかでたまたまと考えることができる。

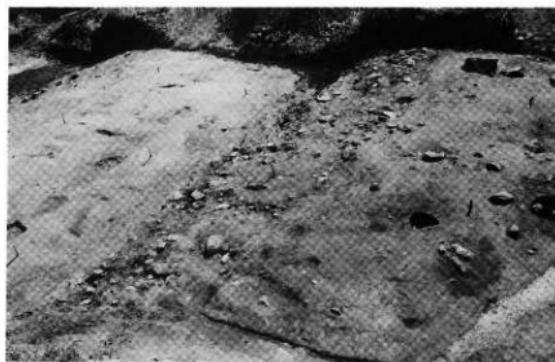
引用文献

Horne, J. C., Ferm, J. C., Caruccio, F. T. and Bagni, B. P., 1978, Depositional models in coal exploration and mine planning in Appalachian region. American Association of Petroleum Geologists Bulletin, v. 62, p. 2379-2411.



全景

上～中段と旧河岸



下段と旧河岸



第Ⅰ調査区



全景



上段と旧河岸



下段と旧河岸

第Ⅱ調査区



溝状造構とP1～P4



ピット内の詰石 (P4)



集石上杭 1



掘り方内



集石土杭 2



掘り方内

遺 構



第Ⅱ調査区下段
旧河岸の遺物検出状況



遺物出土状況
(8C 区)



作業風景

遺物出土状況など



土層の検討



上層の検討



調査指導会

調査終了（全景）



土層の調査と指導会など



1



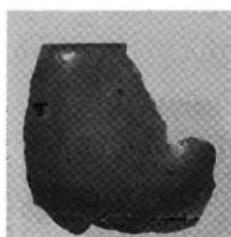
2



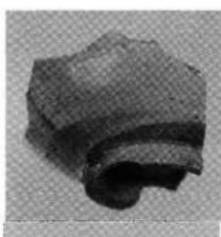
3



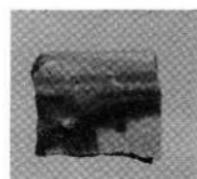
4



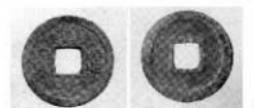
5



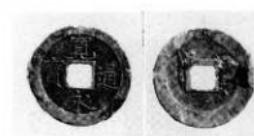
6



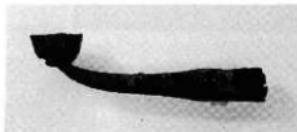
7



8



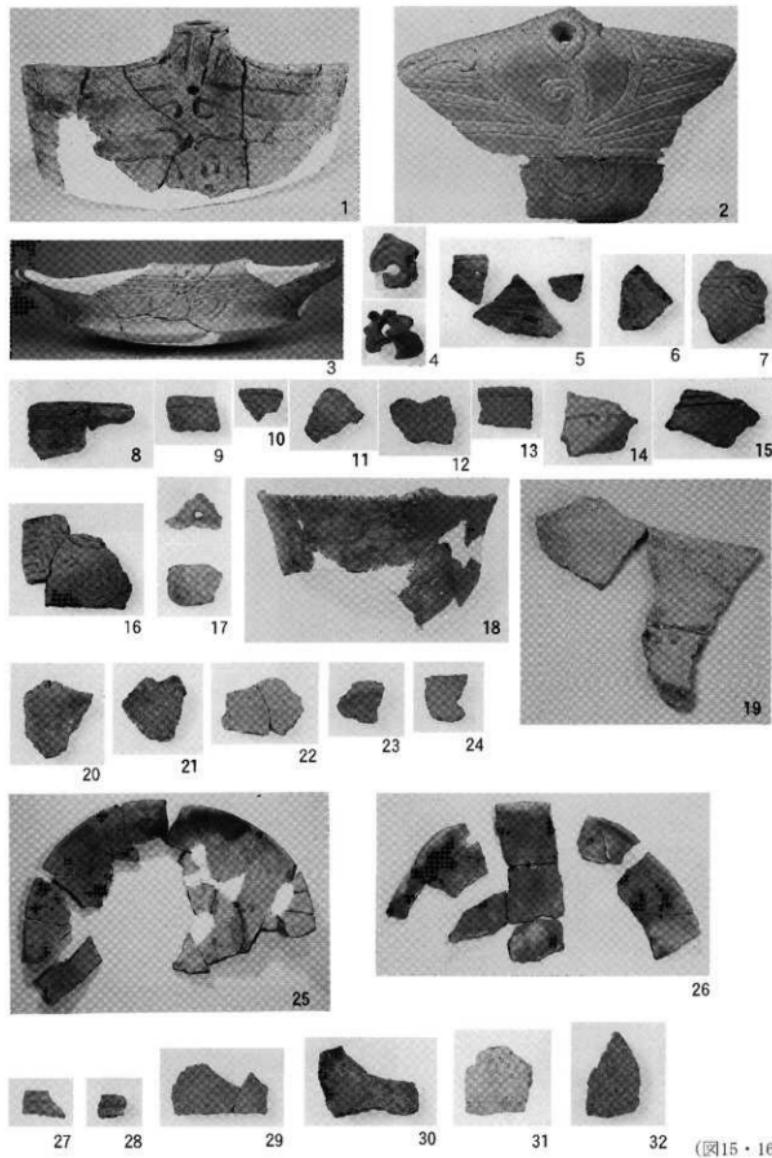
9



10

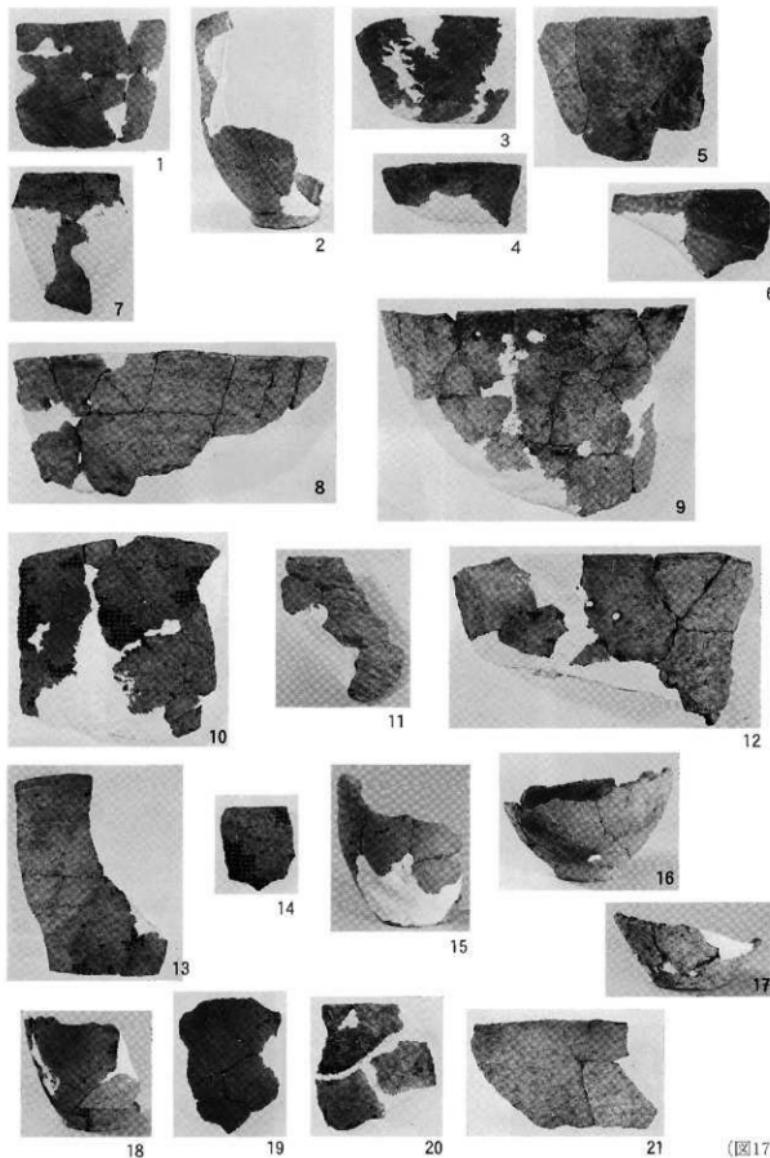
(図14)

上層中の遺物

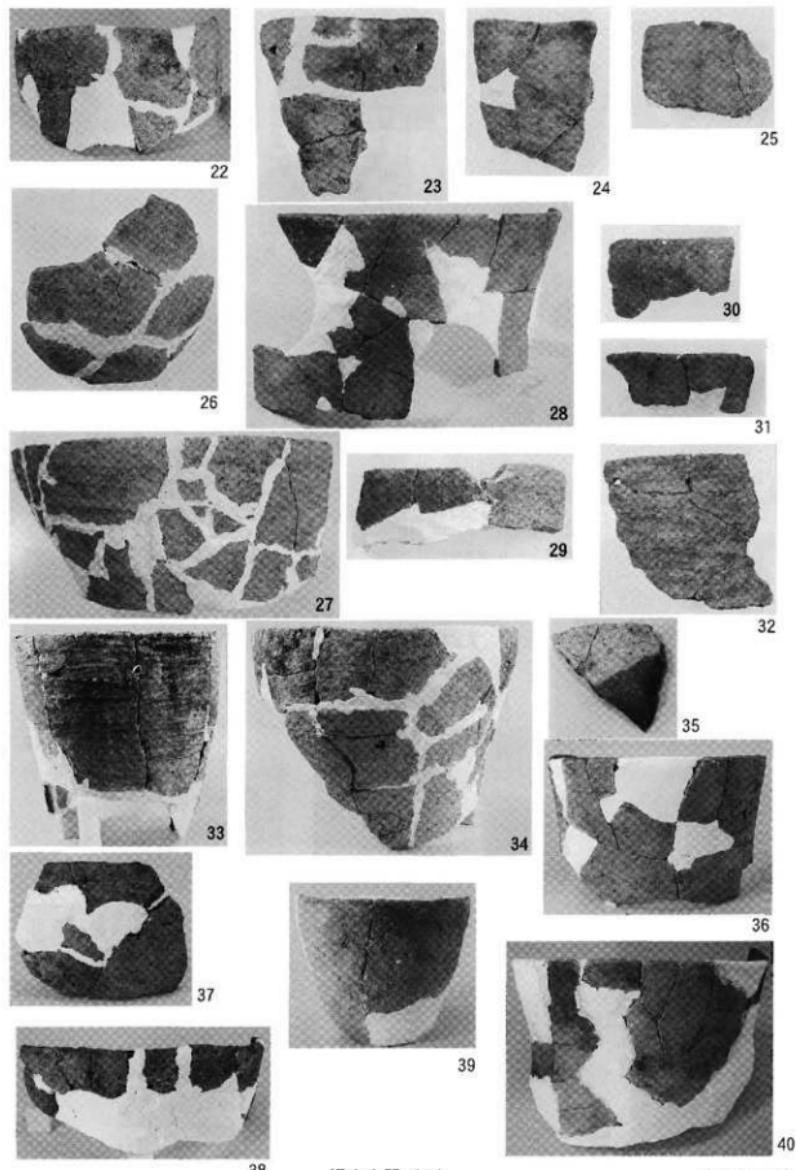


縄文土器 (1)

(図15・16)

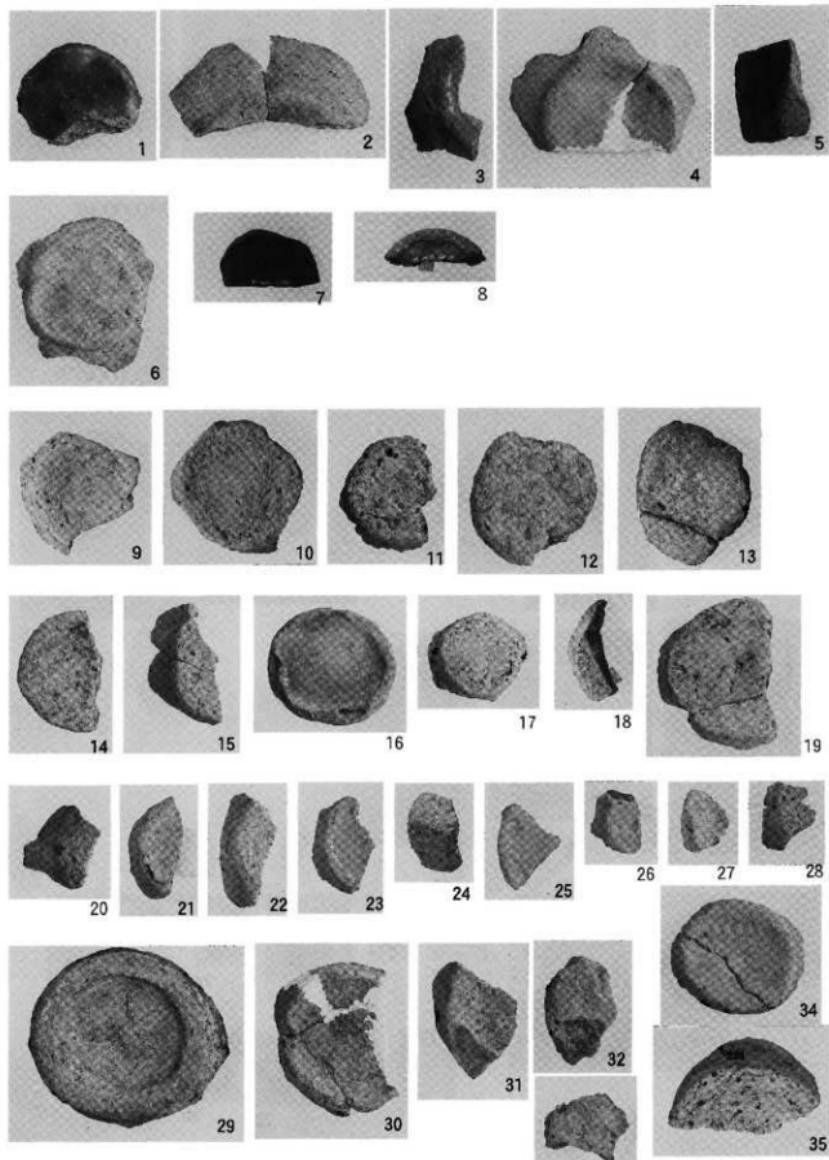


繡文土器 (2)



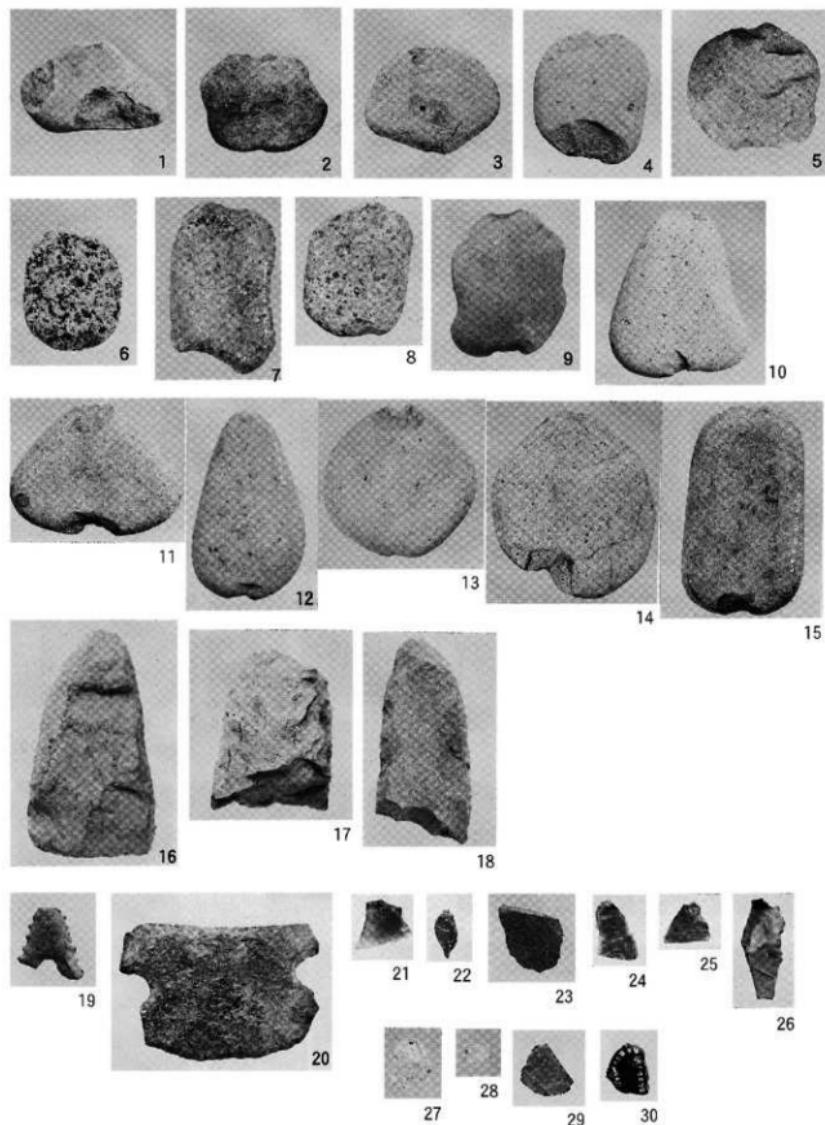
縄文土器 (3)

(図18・19)



縄文土器（底部）

(図20)



(図21～23)

石 器

水ノ手城跡土井平地区

所 在 地	仁多郡奥出雲町佐白932番地・他				
調査面積	1000m ² (内発掘 290m ²)				
調査期間	平成17年4月13日～5月30日				
調査主体者	奥出雲町教育委員会 教育長 渡部周行(前任) 若槻慎二				
事務局	右見公男(教育課長) 徳江良弘(教育課長補佐) 広野 進(生涯学習係主幹) 平田昭憲(社会教育主事)				
調査担当者	野津 旭(埋蔵文化財調査室)				
調査員	杉原清一 藤原友子 家熊 猛 佐野木信義 伊藤正樹 元山貴光 (埋蔵文化財調査室)				
調査指導	島根県教育庁文化財課 山根正明(島根県立大社高校教頭) 蓮岡法暉(日本考古学协会会员)				
地磁気年代測定	時枝克安				
調査協力	上布施自治会 (有)内田工務店 国際航業(株) 社団法人中国建設弘済会 金山浩司(技術員) 栗原久美子(事務員)				
調査作業者	青戸延夫 福間光雄 山根知雄 安部ヒサエ 長谷川トミ子 福間新子 (社団法人中国建設弘済会)				

I はじめに

1. 調査に至る経緯

平成16年6月水ノ手城跡土非平地区の一端に、尾原ダム関連で施工進行中の上布施前布施線道路付替の工事の一端が及ぶことが判った。

この地点の文化財に関する取扱いについては、国土交通省斐伊川神戸川総合開発工事事務所との数度に亘る協議の結果、国が追加取得した区域の一部について発掘調査を行うこととなった。

また、これらの地点から若干離れた山腹部での工事掘削中の面に木炭窯の破断面が露呈していることを発見、これについても緊急的記録調査を行うこととした。

2. 立地と環境

該地は、奥出雲町佐白地内上布施集落の南西端にあたる尾根頂部付近で、南へ西方向眼下に南から北へ流れる斐伊川本流とその北岸沿いに下布施地区があり、急な山腹の下に所在する。この尾根頂部を基幹として中世の山城である水ノ手城跡が存在する。

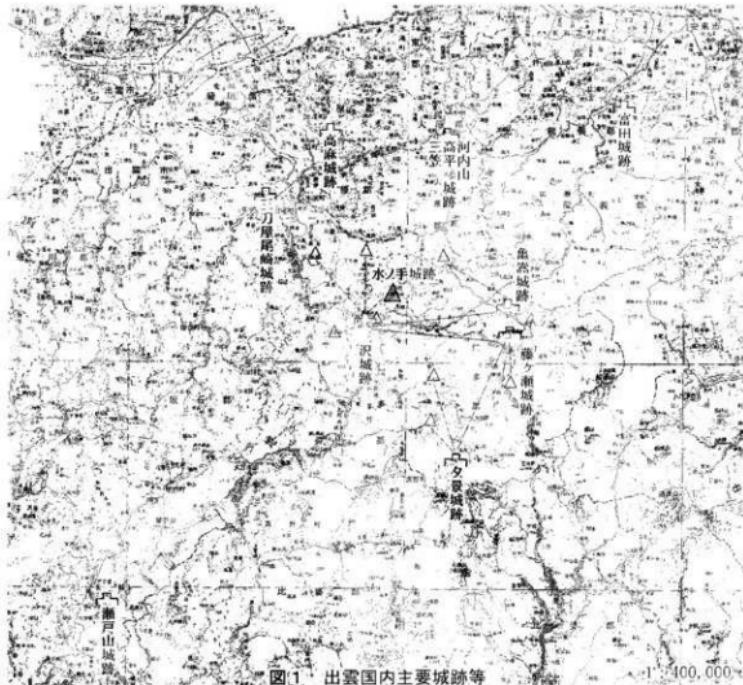


図1 出雲国内主要城跡等

1:100,000

水ノ手城は、中世出雲国内の有力な国人の一員である三沢氏の主要な麾下として、地域の有力者である布施氏が拠ったところと伝えられている。

応仁の乱以降諸国軍旗割拠する15世紀末から16世紀前半のころ、三沢氏は仁多郡を中心に馬来氏とは血縁で結び、仙洞御料所である横田庄をも抑えて拠点を移し、後半には尼子・毛利の間※1を去就しながら、産鉄を背景に勢力の拡大を計った。特に北方にある斐伊川下流域への関心は深

